

# [研究報告]

2004年5月

[団塊世代研究Ⅴ] (平成15年度調査報告)

## ☰ 「団塊世代夫婦の行方」

### に関する調査研究

平成16年5月

研究体制

企画推進	立澤芳男	(有)マーケット・プレイス・オフィス	代表
	加藤信介	(財)ハイライフ研究所	
	萩原宏人	(財)ハイライフ研究所	
	高木麻紀子	(財)ハイライフ研究所	
研究協力	福與宜治	(株)読売広告社	マーケティング本部
	上野昭彦	(株)読売広告社	マーケティング本部

財団法人ハイライフ研究所

# 団塊世代夫婦の行方

## はじめに

日本の社会で「夫婦」を単位としてみた場合、最も多いのが団塊世代の夫婦である。その団塊世代夫婦が、昭和 50 年代にニューファミリーとして日本の消費を急拡大させ日本の経済成長に多大な影響を与えた。その影響は、経済面もさることながら、子育て、教育、親子関係、家族関係など社会面まで広く及んでいる。

そして、現在、50 歳代という年齢に達した団塊世代夫婦は、前の世代もそうであったように、子供の独立や親の介護、さらに、定年期を迎え、家族の離散、再統合を余儀なくされ、家族変容の真っ只中にある。しかし、こと団塊世代夫婦においては、その家族の変容、夫婦関係の中身は前の世代とは大きな違いがあるようだ。

団塊世代は、前の世代と較べると極めて多い人口数であり、であるが故、家庭作りにおいても競争原理が世代内競争として働いてきたこと、あるいは、今までにはなく女性の自立意識が強いことなど等、特異な世代特徴を持ち続けた。また、向老期を迎えた現在の団塊世代は、長期経済低迷からくる厳しい所得・労働・雇用環境下におかれ、向老期の状況は将来生活のゆとりの面で、前世代とは雲泥の差がある。

また、夫婦の関係においては、前の世代の夫婦イメージであった夫唱婦随型の夫婦は少なくなり、団塊世代夫婦の関係は、夫婦相互自立型、分業型、友達型など新しい多様な関係に変わってきている。

若い頃、幸せで明るく楽しい家族を志向し、ニューファミリーを作り上げた団塊世代夫婦は、今、子供が家族から離れて夫婦二人の生活がはじまりつつある。その団塊世代夫婦は、どこまで助け合いどこまで自立的に夫婦として存在するのか、また、どのような生活が待っているのか。

本研究では、団塊世代の夫婦の成り立ちとその成長プロセスを探り、日本の家族構造の変化＝日本の夫婦関係に言及し、50 歳代半ばに達した団塊世代夫婦の実態と特徴を調査研究する。

## 目次

<b>序</b>	<b>1 P</b>
いま、何故、「団塊世代の夫婦」に注目するのか ..... ～団塊世代夫婦研究の課題～	2 P
<b>I・団塊世代の夫婦及び夫婦の関係</b>	<b>4 P</b>
1. 数字で見る団塊世代と団塊世代の夫婦 ..... 5年後の2010年、団塊世代は単独世帯と夫婦のみ世帯が50%を超える	5 P
2. 夫婦関係から見た団塊世代の夫婦 ..... 夫婦関係は経済的依存関係から精神的依存関係へ	8 P
3. 新しい夫婦関係ー新しい自分との出会いー ..... 既存の価値観で拘束し合う関係よりも活かしあう関係を作る	10 P
<b>II・団塊世代夫婦の成長プロセスと特徴</b>	<b>12 P</b>
1. はじめに～団塊世代のライフスタイル・ステージのプロセス～ .....	13 P
2. 青少年期～中高生、就職・大学生時代～ ..... 騒々しい若者たち、自由恋愛・恋愛気分に入る	15 P
3. 若い夫婦時代～20歳代の生活事情～ ..... マイホームを夢見、マイカー、カラーテレビ、エアコンを楽しむ新・核家族	16 P
4. 子育て・中年期の夫婦～30歳代の生活事情～ ..... バブル経済に浮かれた団塊世代夫婦の光と影	19 P
5. 中高年期の夫婦～40歳代の生活事情 ..... バブル崩壊、資産の目減り、ローン返済、消費抑制、金持ち貧乏父さん格差	21 P
6. 高齢者予備軍の団塊世代夫婦～50歳代の生活事情～ ..... 就業、年金、健康、老後の生活四大不安	24 P
<b>III・団塊世代の夫婦の現在と変化の方向</b>	<b>26 P</b>
はじめに .....	27 P
1. 団塊世代夫婦世帯の実際～形成拡大と解体の方向性～ .....	28 P
2. 家庭機能の変化（出産、育児、老親扶養、夫婦関係など）.....	31 P
3. 家族・世帯が抱える課題 .....	34 P

**IV・団塊世代夫婦の今。その実態と意識****36P**

I / 団塊世代夫婦のプロフィール .....	37P
II / 団塊世代夫婦の実生活 .....	40P
III / 団塊世代夫婦の生活意識 .....	44P
IV / 団塊夫婦の夫婦関係 .....	47P
V / 団塊世代夫婦の不安 .....	50P

**V・団塊世代夫婦の危機とその行方****52P**

1. 現在の家族・世帯の傾向 .....	53P
1) 少子・高齢化による世帯変化の動向 .....	53P
2) 家族・世帯変化の傾向 .....	54P
3) 団塊世代家族の変化ファクターと変化スタイル .....	54P
4) 団塊世代家族の変化スタイルとその変化要因 .....	55P
2. 分化する団塊世代の世帯・家族 .....	56P
1) 団塊世代世帯の将来推計－社会保障／人口問題研究所－ .....	56P
2) 分化し再構築される団塊世代の夫婦 .....	57P
3) 団塊世代夫婦のグルーピング .....	58P
3. まとめ・団塊世代夫婦の行方 .....	59P
1) このままだと、すれ違い・相互批判を繰り返す団塊世代夫婦 .....	60P
2) 戦後の民主的家族モデル(団塊ニューファミリー)を壊す少子高齢社会 .....	62P
3) ジャパン夫婦モデルの可能性 .....	63P

# 序

いま、何故、「団塊世代の夫婦」に注目するのか

## ～団塊世代夫婦の研究課題～

### 現在の団塊世代問題は、夫婦の問題である

2010年頃には、いわゆる「団塊世代」（昭和21年・1946年～昭和25年・1950年生まれ）が60歳を超え、その多くが定年（法定下限60歳）による退職を迎える。この世代は量的に他の世代を凌駕しており、そのインパクトは少子高齢化社会における初期の顕著な出来事として、経済社会の諸局面に大きな影響を与える。例えば、その多くがそのまま引退をした場合、労働市場における労働供給減少、現役世代と引退世代の比率が変わることによる社会保障における負担と受益のアンバランス化等、多くの問題を生じる。そしてそれらは日本のマクロ経済、財政、税収等へ大きな影響を与えることとなる。

しかし、団塊世代の退職の問題には、日本経済への影響というよりも、日本の社会構造を大きく変えてしまうほどのテーマが隠されている。

団塊世代は、リストラや定年問題、更にその後の雇用や年金問題を抱えおり、それはとりもなおさず団塊世代の男性問題として捉えがちだが、それで済む訳ではない。それら一連の団塊世代の課題は、共働き夫婦や配偶者の立場にもある多くの専業主婦など団塊世代女性（団塊世代の約半数である500万人）の生活の変化に直結する。団塊世代の男性だけの問題として解決するのではなく、団塊世代の半分を占める団塊世代の女性を意識した、つまり、夫婦の問題として取り扱われるべきである。定年後の生活は、男性個人ではなく夫婦の問題として認識する必要がある。

### 定年後、さらに20年間夫婦生活が待っている。長期持続化で問われる夫婦の絆

現在、向老期に入った団塊世代は、子供の晩婚化、未婚者の増加、孫を産まない子供たち、さらに、世界一長寿化する親たちを抱えている。つまるところ、今までにない家族長寿化現象が起こっている。

しかし、長寿化で問題となるのが夫婦関係の長期持続化である。今までは、夫の死亡による家族世帯の分化は、一応計算上の範疇にあったが、長寿社会になり、団塊世代の定年退職60歳後の生活は、平均寿命で換算すると、昭和45年当時と比べると平成12年では、10年以上延びており、夫婦の生活は定年後さらに20年近く続くことになる。夫婦の長寿化というかつて見られなかったテーマを、団塊世代夫婦に課すことになる。

団塊世代では、家族の多様化や分散を前に、夫婦関係がこじれ、熟年離婚や中高年自殺などが増え続けているが、これらの新しい家族長寿化現象に対応するためには、より夫婦関係が重要になる。

世帯の基本単位は「夫婦」であり、長寿化社会は夫婦関係の危機をはらんでいる。

## 団塊世代家族の多様化、分散化は、夫婦の共同責任

年齢 50 歳を過ぎると「夫婦と子供から成る世帯」を基本とする核家族世帯は、子供の結婚や世帯主の死亡や離婚などで「夫婦のみの世帯」や「片親と子供からなる世帯」が増える。また、高齢者介護などで「親（配偶者の親も含む）との同居」も増えるなど、多種多様な世帯が形成され、今までの家族は分散・分化する。年齢を重ねると、どの世代にも共通する世帯の変化ではある。

しかし、「マイホーム核家族」を良しとする第一世代であった団塊世代は、子供への考え方や親に対する考え、家に関する考えは、前の世代とは、意見を大いに異にしている。団塊世代は、日本の新しい家族（マイ・ファミリー、マイ・カーなどマイを優先させる家族）を意識的に作り上げた世代である。夫婦共にして「マイ」にこだわり続けたその団塊世代が、今、自らが作り上げた新しい家族を壊せざるを得なくなっている。団塊世代世帯の分散と文化は、家族＝マイファミリーの分散と分化、すなわち、夫婦の共同責任に他ならない。

日本の社会では考えられなかった子供の晩婚化、未婚者の増加や孫を産まない子供たちに相対し、揺れ動く家族を支えあうのは夫婦の協力以外に解決策はない。団塊世代の夫婦関係の実態究明があつて初めて団塊世代の問題が明らかになる。核家族で生活してきた団塊世代夫婦は、どう対応するのか。その夫婦の対応によって、日本の家族が変わり、ひいては日本の社会構造とマクロ経済構造を脅かす事になる。

以上、団塊世代の夫婦に注目する理由である。

— 団塊世代夫婦のライフステージ（典型例） —

ライフ・ステージ	夫の年齢	年号	平均寿命(歳)		
			男	女	
・ 出生	0 歳	昭和 21～25 年			
・ 結婚（夫婦）	27 歳	昭和 50～55 年頃	昭和 45 年	68	73
・ 第一子、	32 歳	昭和 50～60 年頃	昭和 50 年	70	75
・ 第一子、	37 歳	昭和 60 年頃～	昭和 60 年	74	79
・ 第一子中学校入学	40 歳	平成元年頃～	平成 2 年	75	81
・ 第一子高校入学	45 歳	平成 5 年頃～	平成 7 年	76	82
・ 第一子大学入学・卒業	50 歳	平成 10 年頃～	平成 12 年	77	83
・ 第一子就職・結婚（現在）	55 歳	平成 15 年頃～			
・ 夫・定年	60 歳	平成 20 年頃～			
・ 夫・死亡	79 歳	平成 40 年頃～			

## I ・ 団塊世代の夫婦及び夫婦の関係

## 1. 数字で見る団塊世代の夫婦

5年後の2010年、団塊世代は単独世帯と夫婦のみ世帯が50%を超える

### 1) 団塊世代の世帯数は553万世帯、他世代を100万世帯上回り、世帯数でも突出。

日本の人口は約1億2千万人であるが、一般世帯数（二人以上）は約4千7百万世帯である。その内、世帯主が団塊世代である世帯数は約553万世帯、全世帯数の約12%を占める。5歳年齢別で見た世帯数では、他の年齢世代（5歳年齢別）と比べると約100万世帯も多く、家族類型別で比較してもそれぞれ他の世代を大きく上回る。

団塊世代は、人口数において、突出世代として注目されるが、世帯数においてそれ以上に突出している。

▼5歳年齢別（35歳～69歳）世帯家族の類型（単位：全国は千、%）

年齢	一般世帯 総数	核家族世帯										
		総数	構成 比	夫婦のみ	構成 比	夫婦と 子供	構成 比	男親と 子供	構成 比	母親と子 供	構成 比	
35～39	3,515,892	2,479,165	70.5	358,092	10.2	1,840,292	52.3	19,762	0.6	261,019	7.4	
40～44	3,564,827	2,495,539	70.0	242,721	6.8	1,880,447	52.8	32,197	0.9	340,174	9.5	
45～49	4,396,774	2,924,571	66.5	314,565	7.2	2,095,756	47.7	59,667	1.4	454,583	10.3	
<b>50～54</b>	<b>5,533,242</b>	<b>3,592,408</b>	<b>64.9</b>	<b>642,072</b>	<b>11.6</b>	<b>2,350,989</b>	<b>42.5</b>	<b>91,271</b>	<b>1.6</b>	<b>508,076</b>	<b>9.2</b>	
55～59	4,810,963	3,168,398	65.9	968,604	20.1	1,779,798	37.0	82,624	1.7	337,372	7.0	
60～64	4,316,434	2,813,849	65.2	1,303,131	30.2	1,202,059	27.8	67,532	1.6	241,127	5.6	
65～69	3,969,242	2,449,084	61.7	1,464,281	36.9	743,290	18.7	55,510	1.4	186,003	4.7	
全国	46,782	27,332	58.4	8,835	18.9	14,919	31.9	545	1.2	3,032	6.5	
年齢	その他親族										特掲	
	夫婦と 両親	構成 比	夫婦と ひとり親	構成 比	夫婦、子、 両親	構成 比	夫婦、子、 ひとり親	構成 比	その他	構成 比	3世代 世帯	構成 比
35～39	3,456	0.1	13,677	0.4	51,284	1.5	123,578	3.5	73,464	2.1	221,252	6.3
40～44	4,953	0.1	19,124	0.5	96,012	2.7	237,538	6.7	95,424	2.7	402,155	11.3
45～49	13,696	0.3	44,300	1.0	130,989	3.0	388,782	8.8	150,689	3.4	627,770	14.3
<b>50～54</b>	<b>32,852</b>	<b>0.6</b>	<b>116,728</b>	<b>2.1</b>	<b>123,659</b>	<b>2.2</b>	<b>493,724</b>	<b>8.9</b>	<b>233,397</b>	<b>4.2</b>	<b>783,227</b>	<b>14.2</b>
55～59	33,622	0.7	151,214	3.1	89,786	1.9	317,446	6.6	234,325	4.9	572,886	11.9
60～64	32,539	0.8	151,674	3.5	145,095	3.4	174,554	4.0	235,698	5.5	489,548	11.3
65～69	27,881	0.7	99,588	2.5	241,566	6.1	97,716	2.5	222,472	5.6	493,560	12.4
全国	238	0.5	698	1.5	1,441	3.1	2,083	4.5	1,884	4.0	4,715	10.1

注；構成比は、年齢別一般世帯数に占める割合 資料；平成12年国勢調査

## 2) 376 万世帯の団塊夫婦は、子供や親との別居・同居などで家族は収縮しはじめた

それでは、本研究の調査分析対象である「団塊世代夫婦」はどのくらいいるのだろうか。国勢調査の世帯データ、夫婦という単位を軸に世帯データを見直してみる。

平成 12 年の国勢調査によると、年齢 50～54 歳が世帯主である団塊世代の一般世帯数は 553 万世帯であるが、その 553 万世帯の中には、「母親と子供からなる世帯 (51 万世帯)」や「父親と子供からなる世帯 (9 万世帯)」、「単独世帯 (92 万世帯)」、「その他の親族からなる世帯」など、配偶関係が見られない世帯もある。本研究で言う「団塊世代夫婦」とは、それらを除いた一般世帯 376 万世帯を指しているが、団塊世代夫婦は、団塊世代の一般世帯の 68%を占めている。

しかし、核家族イメージが先行する団塊世代は、全てが家族の初期段階である「夫婦と子供から成る」世帯だけではない。「夫婦と子供から成る世帯」は 235 万世帯で、団塊世代の一般世帯の 42.5% (団塊世代夫婦の 62.5%) を占めるが、半数を大きく割っている。その代わり、年齢 50 歳を超えた頃から、「夫婦のみの世帯」が 64 万世帯で団塊世代世帯の 11.6%、「三世代世帯」が 78 万世帯 (団塊世代世帯の 20.8%) を占めるなど、団塊世代夫婦は多様化している。

### ▼ 「団塊世代の夫婦」の内訳 (単位 ; 千、%)

	総数	構成比	構成比
団塊世代・一般世帯	5,533,242	—	100.0
「団塊世代の夫婦」世帯	3,760,024	100.0	68.0
・夫婦のみ	642,072	17.1	11.6
・夫婦と子供	2,350,989	62.5	42.5
・夫婦と両親	32,852	0.9	0.6
・夫婦とひとり親	116,728	3.1	2.1
・夫婦、子供、両親	123,659	3.3	2.2
・夫婦、子供、ひとり親	493,724	13.1	8.9
男親と子供	91,271	—	1.6
母親と子供	508,076	—	9.2
単独世帯	924,900	—	16.7
特掲 / 3 世代世帯	783,227	20.8	14.2

資料 ; 平成 12 年国勢調査「世帯 (一般世帯) 家族の種類」

注 ; 1) 国勢調査における世帯主とは、収入の多少、住民基本台帳の届け出等に関係なく、世帯の判断による。

2) 一般世帯 = 住居と生計を共にしている人の集まり又は一戸を構え住む単身者

3) 世帯の家族類型は、一般世帯をその「世帯員の世帯主との続き柄」により区分

### 3) 団塊世代夫婦の未来。30%が60歳台で「二人だけの夫婦」に。

社会保障・人口問題研究所の世帯の将来推計によると、2005年の夫婦のみの世帯が団塊世代世帯の19.7%を占めていたが、5年後の2010年（団塊世代が65～69歳）には29.1%と大幅に上がる。2020年（団塊世代が70～74歳）には、ピークの37.6%に達する。団塊世代は、60歳を境に夫婦と子からなる世帯から夫婦のみの世帯へと移行しはじめ、75歳以降さらに単独世帯へと移行する。

—団塊世代世帯の将来推計～社会保障／人口問題研究所～

▼団塊世代の世帯構成割合(2000年～2025年) (単位；%)

	団塊世代年齢	世帯計	単独世帯	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他
2000	50～54歳	100	16.7	11.6	42.5	10.8	18.4
2005	55～59歳	100	19.4	19.7	34.2	9.3	17.5
2010	60～64歳	100	21.8	29.1	25.2	7.8	16.1
2015	65～69歳	100	25.6	35.5	18.0	6.8	14.1
2020	70～74歳	100	30.2	37.5	13.7	6.3	12.4
2025	75～79歳	100	35.8	35.8	10.8	6.4	11.2

▼団塊世代の世帯推計(2000年～2025年) (単位；1,000世帯)

年	団塊世代年齢	総数		単独世帯		夫婦のみ		夫婦と子		ひとり親と子		その他	
		総数	伸び率	単独世帯	伸び率	夫婦のみ	伸び率	夫婦と子	伸び率	ひとり親と子	伸び率	その他	伸び率
2000	50～54	5,533		925		642		2,351		599		1,016	
2005	55～59	5,543	1.00	1,075	1.16	1,090	1.70	1,895	0.81	513	0.86	971	0.96
2010	60～64	5,439	0.98	1,187	1.10	1,580	1.45	1,371	0.72	423	0.82	878	0.90
2015	65～69	5,264	0.97	1,347	1.13	1,867	1.18	948	0.69	358	0.85	744	0.85
2020	70～74	4,986	0.95	1,504	1.12	1,868	1.00	681	0.72	315	0.88	618	0.83
2025	75～79	4,496	0.90	1,608	1.07	1,611	0.86	485	0.71	288	0.91	503	0.81

資料；社会保障／人口問題研究所「世帯推計2002年」

#### ■団塊世代夫婦の定義■

団塊世代夫婦とは、本研究では、平成12年国勢調査時に50～54歳（昭和21年から昭和25年生）で、同調査の「世帯の家族類型・一般世帯（約553万世帯・住居と生計を共にしている人の集まり）」のうち、世帯主が団塊世代で、配偶者、子（又は子の配偶者）、世帯主の父母（又は世帯主の配偶者の父母）、祖父母及び孫などの直系世代と、それぞれ同居する世帯を「団塊世代夫婦」としている。

## 2. 夫婦関係からみた団塊世代夫婦

夫婦関係は経済的依存関係から精神的依存関係へ

### 1) 冷淡な夫婦関係

全国ネットの結婚情報サービス「オーネット」が30代、40代の父親に行ったアンケートでは、「子育てで後悔していること」として、多いものから「配偶者に頼りすぎた」「叱るべきときに叱らなかった」「自分の価値観を押しつけた」「日常会話が少なかった」「暴力を振るってしまった」などという項目が並んでいる。

これは妻が夫への不満をぶちまける内容ときれいに重なっている。子育てを始めた時期にこうした不満を夫に持ってしまっていて解決できなかったときは、恨みに似た感情がずっと残ることさえあるという。また、1999年8月に元厚生省の『全国家庭動向』によると

(協力してくれない夫)

- a. 家事の80%以上をやっている妻はどの年代でも8割以上、40代の場合は9割
- b. 夫が家事しないのは40-60歳の夫婦の中で4割

(夫婦関係は冷淡)

- a. 一緒に夕食を取る夫婦は約7割
- b. 一緒に買い物に行く夫婦は約3割
- c. 一緒に旅行の夫婦は約2割
- d. 難題にぶつかった時相談し合う夫婦は約3割
- e. 高価な物(車など)を買う時、夫が決定するのは4割
- f. 夫婦で話し合って決定は5割。妻が家事のことを自分で決定するのは7割

### 2) ゆれる専業主婦の満足度

従来夫婦間には、夫は職業を持ち生計を立てる役割、妻は家事や育児など家庭をまとめる役割といった性別役割が存在していたが、近年は女性の職場への進出が著しくなっており、性別役割が変化してきている。

夫は収入や社会的地位といった、職業資源を得ることが一般的であるが夫の職業資源と夫婦の結婚満足度は正の相関関係にあるという。夫の職業資源は高い程、妻に自分の社会的地位も高いのだと思わせるため、妻の結婚満足度が高まり、それに伴い夫の結婚満足度も高まるためであると考えられる。しかし、兼業主婦を持つ夫と専業主婦を持つ夫とでは結婚満足度に影響を与える要因が異なっている。

兼業主婦を持つ夫は、自分の職場での成功等を妻が助けてくれたためであると考え、事が少なく、職場での出来事が結婚満足度には影響を与えないのに対して、専業主婦を持つ夫は、職場での成功等を妻が助けてくれたためであると考えることが多くなるため、職場での出来事が結婚満足度に影響を与える。

### 3) 離婚は「悪」から「良し」へ

博報堂生活総合研究所の調査では、「夫婦はどんなことがあっても離婚しないほうがいい」と思っている人は、1988年には64%だったが、1998年には48%に低下した（以下のデータも1988年、1998年の順）。「我慢しながら結婚を続ける必要はない」と考える人が過半数に増加しているのだ。離婚の増加は日本の夫婦の変化を示している。

2002年の調査では、結婚生活が20年以上の夫婦のいわゆる熟年離婚の件数は4万5000件。75年の7倍近くになっている。50代の夫婦は親の介護や子どもの独立など、夫婦のあり方に転機が訪れる時期。お茶の水女子大の袖井孝子教授（家族社会学）は、現在50代の夫婦は、リストラなどの影響を受け、従来の夫婦像がさらに大きく変わる可能性がある、と指摘する。

### 4) 経済的依存関係から精神的依存関係へ

今までの夫婦関係というのは依存関係で成り立った。妻は夫の経済力に依存し、夫は妻の身の回りの世話などに依存した。しかし、共働きが増えると、そういう補完的な依存関係は成立しなくなる。結局、夫婦関係の絆は愛情しかない。これからの夫婦関係は、経済的依存関係から精神的依存関係へとかわっていく。

日本の夫婦は定年後、上手に夫婦関係を生きるケースと、逆に、いっしょにいるのが苦痛になってしまうケースに分かれるようだ。特に後者はモーレツ社員といわれたようなサラリーマン家庭に多く、諸外国ではあまり聞かれないものだ。

夫の定年後、昼食をつくらない妻のことが話題になっていた。定年後の昼食づくりは、妻たちが一様に感じる夫による拘束感の象徴なのだという。

結局は妻ががまんを続けてきた夫婦なのだ。

### 3. 新しい夫婦関係 —新しい自分との出会い—

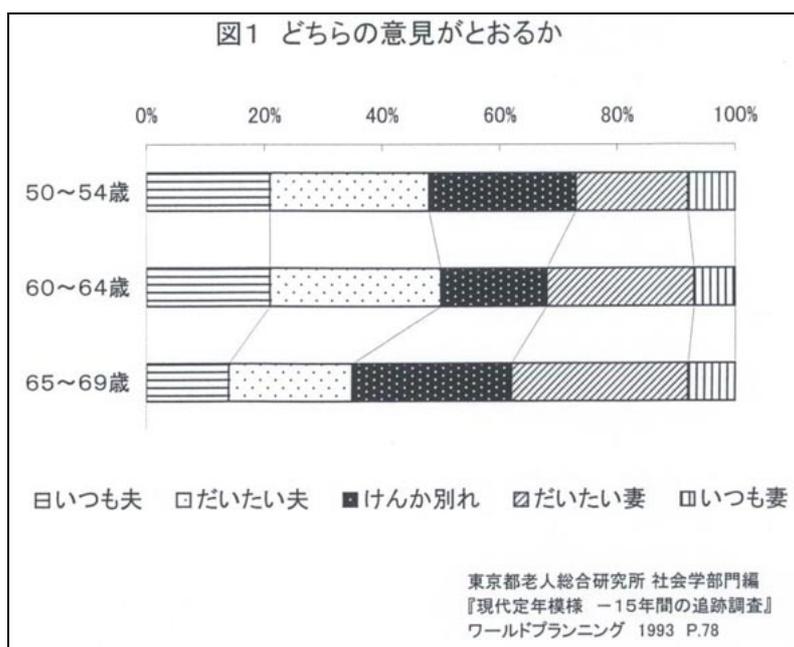
既存の価値観で拘束し合う関係よりも活かし合う関係を作る

#### 1) 夫婦関係の問題点—暗黙の了解が崩れるそれぞれの足元—

夫婦関係の難しさは、東京女子大学文理学部助教授岡村清子氏は、以下の6つにまとめている

- ①夫の職業からの引退はあっても、妻の主婦業からの引退がない。この差は、自由時間が女性よりも男性が平均約1時間長いという結果になって現れる
- ②これまで長い期間に培ってきた夫婦間の暗黙の勢力関係や意思決定などのあり方が定年や病気などによって変わる。一家の稼ぎ手であった夫は無職となり家庭内での地位が低くなったり、病を契機に勢力関係が逆転することもある。

図1は、定年後に妻の発言力が強くなっていることを示す。一方で、夫から妻への定年後のドメスティック・ヴァイオレンス（パートナーからの暴力）や介護者である夫や妻から被介護者への虐待なども問題になっている。



- ③子育てのような夫婦の共通目標がなくなり、夫婦で一緒にいる必然性や同じ目標に向かったの共同行動が減少する。
- ④各々の個室もない狭い住宅の中で、夫婦で一緒にいる時間が長くなる。
- ⑤これまでの夫婦の歴史の中で、夫婦間の信頼感や共同性を乱した過去の事実を記憶から消し難く、何も無かったことにして新しい気持ちで向かい合うことが困難。
- ⑥夫婦や家族についての価値観が若い世代では変化しており、結婚当時と大きく変わっているにも関わらず、夫婦の間で新しい価値観への適応にギャップが生じる。これらの難しさは、夫よりも妻の方で感じていることが多い。

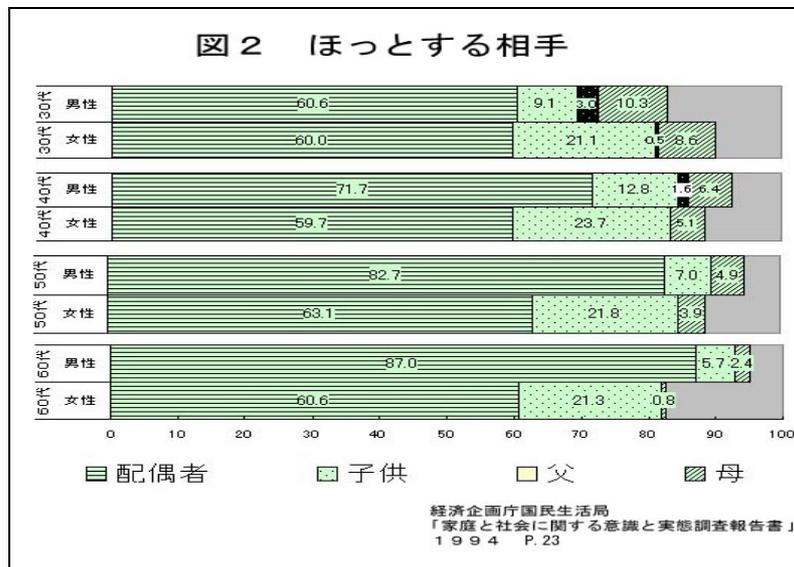
## 2) 中高年夫婦間のギャップ—引退のある男性と引退の無い女性—

わが国の夫婦関係の調査では、中高年層の夫婦間で情緒面でのギャップがよく指摘される。例えば、図2にみられるように一緒にいて「ほっとする相手」が、年齢が上がるほど男性では配偶者の比率が高くなり50歳代、60歳代では8割を越えるのに対し、女性では6割前後に過ぎない。なぜ、このようなギャップが生じるのか、

その理由としてこれまでの結婚生活で女性が自分自身の人生を生きることが少なく、稼ぎ手である夫中心の生活を送ってきたことが上げられる。

「やっとみつけた自分自身の生活が夫の定年後また壊されてしまう」という被害者意識かもしれない。

今後は、これらの問題を夫婦で自覚して調整していくことが重要である。



友人関係を確保し、かつ夫婦の共同時間や共通空間をもつという関係をつくること。既存の価値観で拘束し合う関係よりも生かし合う関係を作る努力が必要で、そのためには男性も生活自立をしながら自分たち夫婦の健康や自立度に見合った相互依存関係を作っていく、自分たち独自の夫婦のあり方を模索していくことが求められる。

(東京女子大学文理学部 助教授 岡村清子氏)

## Ⅱ・団塊世代夫婦の成長プロセスと特徴

戦後及び高成長期の社会生活基盤や人口基盤の変化で夫婦の地位・役割・勢力関係がどのように変わってきたのか。また、団塊世代の夫婦は今までの夫婦とはどこがどう違うのか。ここでは団塊世代に成長を、各時代背景(社会経済の状況、人口動態の状況)と団塊世代の生活を見ながら追ってみる。

## 1. はじめに～団塊世代の成長プロセス～

まず、団塊世代の成長プロセスと特徴を見る前に、戦後の日本経済と団塊世代の相関関係と戦後の日本人の典型的なライフスタイルを確認しておこう。

### 1) 団塊世代の成長と日本の経済活動の関係

日本の経済政策と団塊世代の関係を簡単に整理しておく。

団塊世代は、昭和40年代に就職し生計独立し、婚姻をしている。その後、50年代には、マイホームを購入し、車や家庭電器など短期集中的な大規模な消費活動を行っている。団塊世代は、景気促進世代（団塊世代の就職と婚姻期、マイホーム購入期）ともいわれ、貸家需要、家庭用耐久財需要を生み出している。働き盛りの35歳から45歳においては、マイ・ホームなど持ち家需要、事業拡大投資を生んだ。

一方、団塊世代が加齢し50歳くらいになった時、企業財政の逼迫で収入が伸び悩み、生活費が逼迫する。義務的貯蓄（老後、住宅ローン返済、教育ローン等）が強いられ、消費を抑制している。団塊世代は、景気促進世代から社会責任世代へと転じている。

#### —団塊世代の成長と日本の経済政策—

##### 団塊世代の小中学生時代

- ・経済自立計画(昭和31～35年) ・新長期経済計画(昭和33～37年)
- ・神武景気(32) ・なべ底不況(33)

##### 団塊世代の高校／大学生時代

- ・国民所得倍増計画 池田内閣(昭和36～45)
- ・岩戸景気(36)、・オリンピック景気(38)、・イザナギ景気(45)

##### 団塊世代の結婚・子供の育児期

- ・経済社会基本計画「日本列島改造」 田中内閣(昭和48～52年度)
- ・インフレブーム(48)、・オイルショック不況(48)

##### 団塊世代30歳代・子供の教育期

- ・「新経済社会7カ年計画」大平内閣(昭和54～60年度)
- ・1980年代経済社会の展望と指針 中曽根内閣(昭和58～65年度) ・バブル景気

##### 団塊世代40歳代

- ・「生活大国5カ年計画」 宮沢内閣(平成4年度～8年度) ・平成長期不況 ・ITバブル

##### 団塊世代50歳台

- ・平成14年「基本方針2002」経済財政構造改革(小泉内閣) ・デフレ不況

## 2) 戦後日本人の典型的なライフスタイル

団塊世代を中心に戦後の日本人の典型的ライフスタイルを確認する

— 団塊世代夫婦のライフステージ (典型例) —

ライフステージ		夫の年齢	年号
・ 出生		0 歳	昭和 21～25 年
・ 結婚 (夫婦)		27 歳	昭和 50～55 年頃
・ 第一子、		32 歳	昭和 50～60 年頃
・ 第一子、		37 歳	昭和 60 年頃～
・ 第一子中学校入学		40 歳	平成元年頃～
・ 第一子高校入学		45 歳	平成 5 年頃～
・ 第一子大学入学・卒業		50 歳	平成 10 年頃～
・ 第一子就職・結婚 (現在)		55 歳	平成 15 年頃～
・ 夫・定年		60 歳	平成 20 年頃～
・ 夫・死亡		79 歳	平成 40 年頃～
・ 平均寿命	男	77 歳	平成 12 年時点
	女	83 歳	

①女子の初婚平均年齢はおおむね 24 才。男子は 3 才上の 27 歳。

②女子 26 歳のとき第一子出産、その 2 年後に第二子出産。

→戦後、特殊出生率は長期平均おおむね 2 人

③男子が 30 才代後半の時、住宅ローンでマイホーム購入。

→持家・分譲購入世帯主年齢分布、レンジは 20 代後半から 60 代前半、  
ピークは 30 代央、平均 30 代後半

④男子 47 才で第一子大学進学。

⑤50 才で第一子大学、第二子短大卒業。

⑥47 才から 50 才まで教育費、住宅ローンによる家計圧迫ピークへ。(責任世代)

⑦54 才から 56 才で子供の結婚、資金援助、老後資金の貯蓄。

⑧60 才で退職、以後、収入激減、医療費増。

## 2. 団塊世代の“青少年期”

団塊世代の青少年期～中高生、就職・大学生時代～

騒々しい若者たち、自由恋愛・恋愛気分に入る

昭和 30 年（1955 年）から昭和 48 年（1973 年）が「軌跡の成長」と呼ばれた高度経済成長期に当るが、この時期、団塊世代は、産業化の中で良質で大量の労働力として社会に貢献する一方、ファッションから音楽などヤング消費市場も作り上げた。

兄弟姉妹数は 4～5 人で、地方の多くの次男三男、次女三女たちが都会へ就職や大学進学へと移動した。そして、都市部では、若者の大量流入し、自由な生活を楽しんだ。多くの若者がふれあい、結婚までの恋愛気分若者は浮かれ、また、ドライブ、エレキ、ミニスカート、学園闘争など団塊世代の若者たちが「騒々しい若者たち」として社会に躍り出た。

昭和 40 年(1965) 10 月から戦後ベビー・ブーマーを中核とする婚姻ブームを背景とした、いざなぎ契機は、57 カ月長期拡張した。

年 代	昭和 25 年（1950）～昭和 44 年（1969） 0～19 歳／青少年期（出生から中高、就職、大学生時代）
時代背景	「春闘スタート」（昭和 35 年） * 勤労者所得の上昇→人口の都市集中→住宅難→教育施設、 * 医療施設不足→郊外居住（第一次郊外化） * 地方出身若者が都市に集中（就職、就学）で住宅不足 * 高校や大学への進学者数が急増。高学歴社会志向と学校不足で * 受験競争活発化（予備校ブーム）
ライフ ステージ& スタイル	・ 1949 年生まれの「合計特殊出生率」は、4.32 人、兄弟姉妹数は 4～5 人 ・ 団塊世代が小学生となった 1956 年経済白書「もはや戦後ではない」と発表 ・ 「団塊の世代」が就職したこの高度成長期は、年功賃金、長期雇用を柱とした 日本的雇用慣行が普及・定着した時期 ・ 学歴賃金格差は 70 年代が最も大きい（学歴社会化）
団塊世代が牽 引した商品・ 市場	・ 団塊世代が小学校高学年の 1959 年には、週刊漫画雑誌が相次いで創刊 ・ 「団塊の世代」が「ハイティーンになると、ハイティーン市場が膨張 ・ テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫といった当時「三種の神器」といわれた耐 久消費財が家庭へ急速に普及 ・ 「団塊の世代」が小学校の高学年から中学生となっていた 61 年には、テレビ の普及率は 6 割を超え、その後、63 年にはテレビアニメが、さらに 65 年 にはテレビ空想特撮の放送

### 3. 団塊世代の“若い夫婦時代”

#### 団塊世代の若い夫婦時代～20歳代の生活事情～

#### マイホームを夢見、マイカー、カラーテレビ、エアコンを楽しむ新・核家族

昭和46年、団塊世代を中核とする婚姻件数はピークに達した。この時期、団塊世代の大量の就職、結婚による家計の独立、世帯数の増加は貸家需要を増大させるとともに白もの（冷蔵庫、洗濯機、掃除機）、エアコンやTV・オーディオ、家具、家事用品など家庭用耐久財の短期集中的な購入を増大させる。これに励起されて住宅着工の増加、家庭用耐久財生産の増加が続く。しかし、昭和48年（1973）以降、婚姻適齢人口、若者人口は急減、世帯増加率低下、これにより内需（耐久財+投資・建設財）は激減した。昭和47年同年6月「日本列島改造論」。翌7月第一次田中角栄内閣発足。過剰流動を背景に住宅地より地価狂乱し、昭和49年（1974）、戦後初のマイナス成長。物価高騰下の不況、スタグフレーションが発生。内需減少により貿易黒字増大で対米貿易摩擦が起きた。

社会は、「ジャパン アズ ナンバー・ワン」から「不確実性の時代」へ、そして「エントロピーの法則」「宇宙船地球号（成長の限界）」へと移り変わっていった。

年代	昭和45年（1970）～昭和54年（1979） 20歳～29歳（結婚期・大学生、勤労者、世帯家族）
時代背景	<p>「列島改造景気」で昭和元禄気分（昭和46～48年）そして高度成長の終焉へ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>*若者ファッション、旅行ブームなど若者の消費生活が拡大。</li> <li>*婚姻件数がピーク。100万組を超えたのは70～74年の5年間。</li> <li>*それにともない、住宅着工戸数も70年代前半にピークで、借家の着工戸数が多い。（マンションブーム）</li> <li>*公共事業の活発化で、地域整備（交通、道路、医療施設など）が実施され、地方の生活水準も高レベル（車、住宅、自然環境）</li> <li>*「オイルショック」（昭和48年） *大都市圏への人口や産業の集中を抑制</li> </ul>
ライフステージ&スタイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口移動のピークである70年には、「団塊の世代」20歳代前半が最も移動が多い</li> <li>・高校や大学の進学者数が急増</li> <li>・60年代後半の「全共闘（全学共闘会議）」の学生運動が盛んに。</li> <li>・婚姻件数は、「団塊の世代」が20代半ばであった時がピーク。1972年は110万組。</li> <li>・住宅着工戸数は70年代前半にピーク。借家の着工戸数が多い（アパート、下宿）</li> </ul>
団塊世代が牽引した商品・市場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・20代の「ヤング」になると“ヤング的騒々しさ”が日本を圧した（堺屋太一氏）</li> <li>・60年代に「団塊の世代」の間で流行したジーンズ、ミニスカート、アイビールックなどの欧米風ファッションは、その後も若者の日常着として定着</li> <li>・カラーテレビ、クーラー、カー（乗用車）の「3C」と言われた耐久消費財が普及</li> <li>・「団塊の世代」は、日本で初めての本格的なテレビ世代、マイカー世代</li> </ul>

**コラム** 恋愛ごっこ、恋人探し、憧れの恋愛結婚

団塊夫婦の夫婦関係は、恋愛結婚からはじまった

団塊の世代が25歳前後になった1975年の厚生省（現・厚生労働省）の人口動態統計などによると、初婚年齢は男性が27歳、女性が24.7歳。結婚の形態は、「見合い結婚など」が34.9%、「恋愛結婚」が65.1%と恋愛が大きく上回っている。

恋愛結婚と見合い結婚の割合が逆転したのは70年だが、その後の5年間で10ポイントも増加し、団塊の世代が恋愛結婚の新しい流れを作ったといえる。

▼見合い結婚と恋愛結婚の移り変わり（1955～1987）

厚生省出産力調査

	1955～ 59年	1960～ 64年	1965～ 69年	1970～ 74年	1975～ 79年	1980～ 87年
見合い	51.5	46.6	42.5	32.6	30.4	26.5
恋愛（職場）	13.8	20.3	25.6	29.0	26.6	23.5
恋愛（友人の紹介）	9.7	11.7	12.9	14.7	19.7	22.4
恋愛（偶然の出会い）	5.0	4.7	4.8	6.8	7.1	8.6
恋愛（サークル・クラブ）	2.5	3.9	3.1	3.8	5.7	5.9
恋愛（学校）	1.9	1.6	2.8	4.6	4.9	7.7
恋愛（隣人関係）	10.9	7.7	5.2	5.2	2.9	2.9
恋愛（その他）	4.7	3.5	3.1	3.3	2.7	2.5

965～69年＝団塊世代が22～26歳

▼70年代・結婚年表

ラブ／アンノン／自由恋愛／結婚ブーム

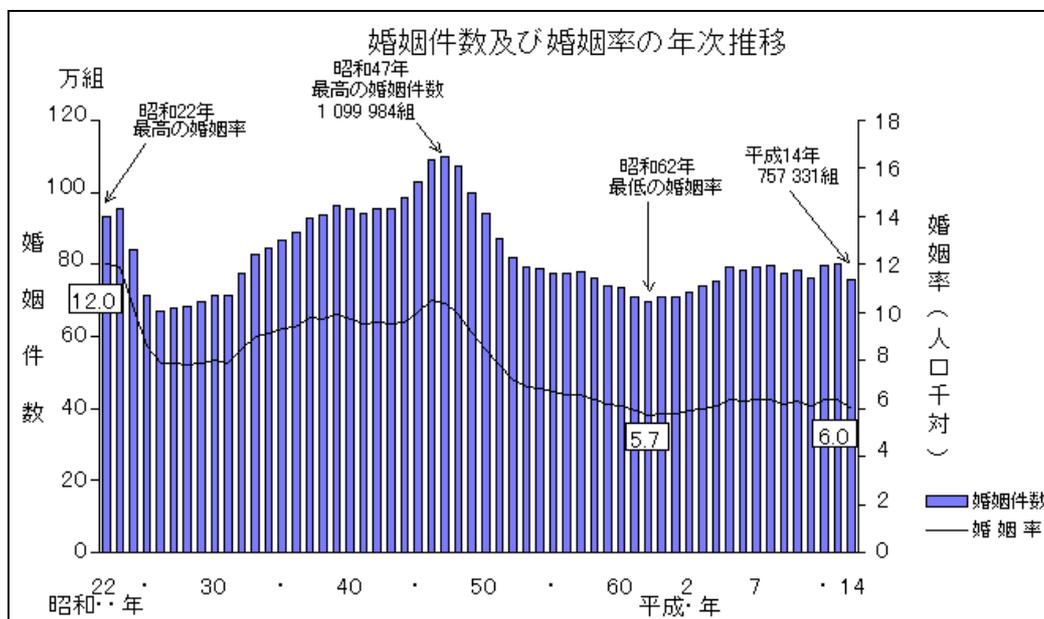
S 45	アンノン族 ウーマンラブ大会、コンピュータで結婚相手を決める仲人連盟が創業
S 46	フィーリング時代
S 47	「中絶禁止法に反対しピル解禁を要求」（中ピ連結成）、情報誌『ピア』創刊
S 48	同棲ブーム（劇画上村一夫『同棲時代』・かぐや姫「神田川」ヒット）
S 49	お見合い番組『パンチDEデート』、ハネムーンに南九州ブーム（挙式者の3分の1） 戦後最高の「結婚ラッシュ」で120万カップル誕生 「3トモ時代」—男女共学・友達・結婚・共働き 団塊世代（S24生まれ）24歳に
S 51	結婚難
S 52	通称かけこみ寺開設、キャンディーズ引退「普通の女の子に戻りたい」
S 54	「ニコニコ離婚講座」開設、未婚の母が過去5年で倍増（厚生省）

**コラム** 日本の結婚事情を大きく変えた団塊世代（団塊世代と結婚）

団塊世代の結婚の特徴

- ・史上初の結婚ブーム(昭和 47 年 110 万組)
- ・同世代人口が多く、競争が激しく結婚もライバル競争になった団塊世代の結婚.
- ・結婚適齢期を引き上げた団塊世代（女性結婚適齢年齢は 24～25 歳、男性は 27～29 歳）
- ・恋愛結婚が見合い結婚を上回った団塊世代の結婚
- ・同年齢結婚、年下との結婚が増えはじめた団塊世代の結婚
- ・借家ブームを生みだした団塊世代夫婦
- ・マイカー—、家電ブームを引張る団塊世代夫婦

▼第二次結婚ブーム（昭和 45～昭和 50 年）は団塊世代の産物



▼団塊世代から「夫婦同年齢」「妻年上」が増えはじめ、同世代感覚重視、男女平等重視傾向

初婚夫妻の年齢差別にみた構成割合（％）の年次推移

年齢差	昭和 45 年	50 年	55 年	60 年	平成 2 年	7 年	12 年	13 年
総 数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
妻年上	10.3	12.5	11.7	12.1	14.3	17.7	21.9	22.5
夫妻同年齢	10.1	12.6	12.8	14.3	15.9	17.6	19.2	19.0
夫年上	79.5	74.9	75.4	73.7	69.8	64.6	58.9	58.5

注：各年に同居し届け出たものについての集計である。

#### 4. 団塊世代の“子育て・教育期”

##### 団塊世代の子育て・中年期の夫婦～30歳代の生活事情～

##### バブル経済に浮かれた団塊世代夫婦の光と影

30代後半から40歳代前半になった団塊世代のマイ・ホーム購入意欲は旺盛で、住宅着工を加速し、耐久財の買い替え需要の短期集中的実現を生み出した。それは、一方で、不動産を中心とする資産価格のみが高騰したが、生活は比較的安定しており、マイホームの充実と家族のレジャーと家族のショッピングに団塊世代家族はひた走る。

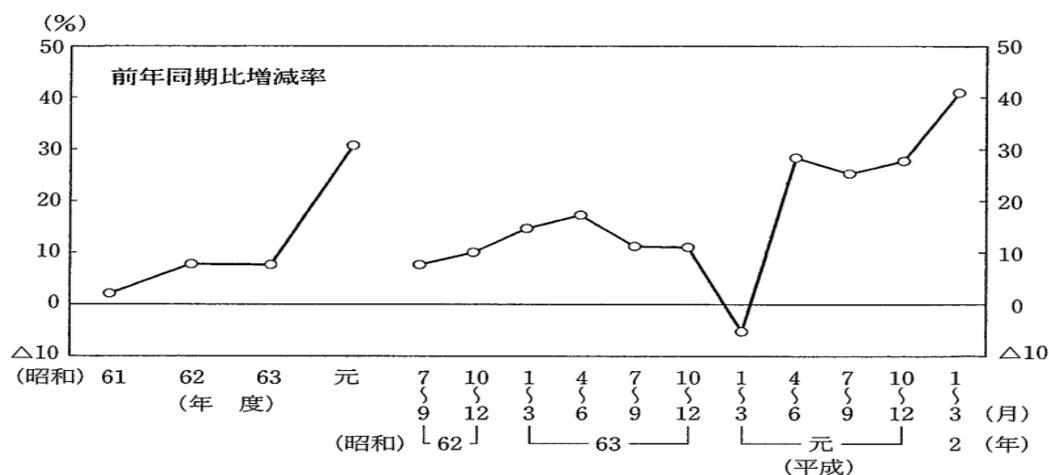
憧れの専業主婦となった団塊世代女性は、子供の教育に注力する一方、団塊世代の男性は企業戦士として会社と仕事に明け暮れることになる。その結果、団塊夫婦の関係は相互尊重しあうものの、時間的空間的な隔たりも出てくるようになる。不倫や子供の暴力問題が多く発生するようになった。

昭和62年(87)円高不況対策と8兆円大型緊急経済対策が功を奏し、財テク・ブーム、節税ブーム、投機ブームを生む。消費は、住宅価格が年収の6倍となりマイホーム諦め組みは高級外車等への耐久財購入など大型高級消費に走る。その頃から、晩婚少子が加速し平成元年(89)は特殊出生率1.57ショックで66年の丙午(1.58)を上回った。

ジャーナリズムは、頻繁に恐慌到来を予言。小さな政府、規制緩和論、民営化、公共部門の企業化・競争原理の強化を言い出すが、日本の家庭の崩壊が様々な形で出はじめる。

年 代	昭和55年(1980)～平成元年(1989)
	30歳～39歳／育児期前期(出産、育児)
生活基盤	「リゾート法」「ふる里創生」(昭和62年) *安定経済化、団塊ニューファミリーが大量に誕生 *経済の国際化、サービス化等が進展 *大都市圏への行政投資の比率も再び拡大
ライフスタイル	・団塊の世代が家庭を持ち、郊外団地に核家族を単位とする「ニューファミリー」が形成 ・住宅着工戸数は、70年代後半、80年代後半にも急増 ・「団塊の世代」の女性は20代後半時の女性が専業主婦になった割合が各世代の中で最も高かった(「金妻」など) ・男性の方は職場での激しい出世競争のなかで「会社人間」となる人が多かった。
団塊世代が牽引した商品・市場	・「団塊の世代」が30代半ばとなった82年には乗用車の普及率が6割を超えた ・乗用車の普及を背景として65～82年の17年間で乗用車関連の余暇市場は1,152億円から2兆148億円へと17倍に拡大(余暇開発センターの推計) ・マイカーでのレジャー体験、ショッピングセンターの利用などは、家族のふれあいなど、家庭生活にも大きな影響 ・レンタルやローンの普及も普及し、主婦層を中心としたカルチャーセンターが増加 ・インスタント食品、外食産業への需要増加なども、「団塊の世代」を中心に広がる

**コラム** 高級大型消費の時代は車でレジャーやショッピングを楽しんだニューファミリー  
**高い伸びを続ける新車新規登録台数**



(備考) 財団法人自動車販売協会連合会「新車新規登録台数」により作成。

▼結婚年表・超豪華ウェディング時代 ダイアナ王妃／お嬢様／新人類／家庭内離婚

S 55	山口百恵・三浦友和 (赤坂・霊南坂教会、挙式2億円、テレビ視聴率 30.7%) 田中康夫『なんとなくクリスタル』刊 (『クリスタル族』の言葉を生む)
S 56	イギリスチャールズ皇太子・ダイアナ <b>ダイアナ妃ブーム</b>
S 58	連続ドラマ『金曜日の妻たちへ』(TBS系列) から <b>「金妻」(不倫願望のある妻)</b> が流行語に。東京ディズニーランドオープン (4月)
S 59	伊集院静・夏目雅子
S 60	松田聖子・神田正輝 (目黒・サレジオ教会、挙式2億円、テレビ視聴率 34.9%) 科学万博つくば 85 開幕。 <b>新人類</b>
S 61	<b>お嬢様ブーム</b> <b>「家庭内離婚」</b> (林郁の著書から流行語に) 『anan』イイ男、寝たい男特集恒例化で女が男を選ぶ時代に
S 62	フジテレビ『ねるとん紅鯨団』放送開始 郷ひろみ・二谷友里恵 (赤坂・霊南坂教会、挙式3億5000万円、テレビ視聴率 47.6%)
S 63	<b>DINKS (double income no kids)</b> アッシー、メッシー、ミツグ君の言葉生まれる <b>『Hanako』創刊</b>

## 5. 団塊世代の“中高年期”

### 団塊世代の中高年期の生活事情

#### バブル崩壊、資産の目減り、ローン返済、消費抑制、金持ち貧乏父さん格差

40歳代になった団塊世代の家庭は、住宅ローン、教育ローン、老後の蓄えの為、義務的貯蓄が増大し、多額の生活費が必要となり家計の資金繰りは逼迫し、消費抑制はピークに達する。

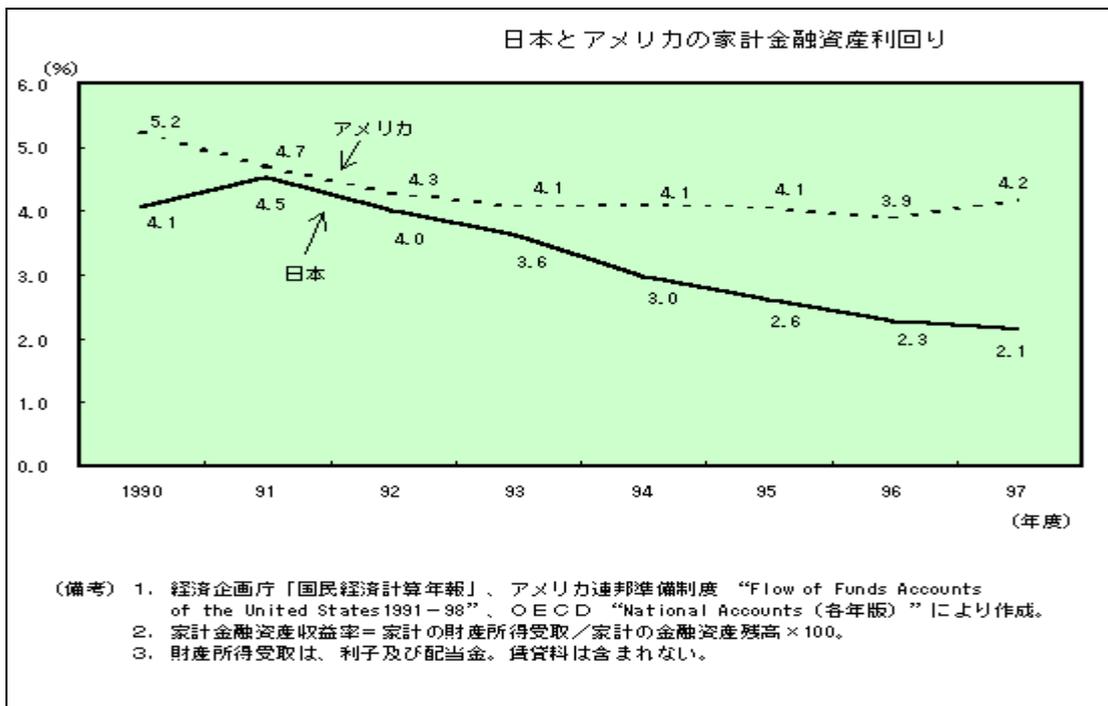
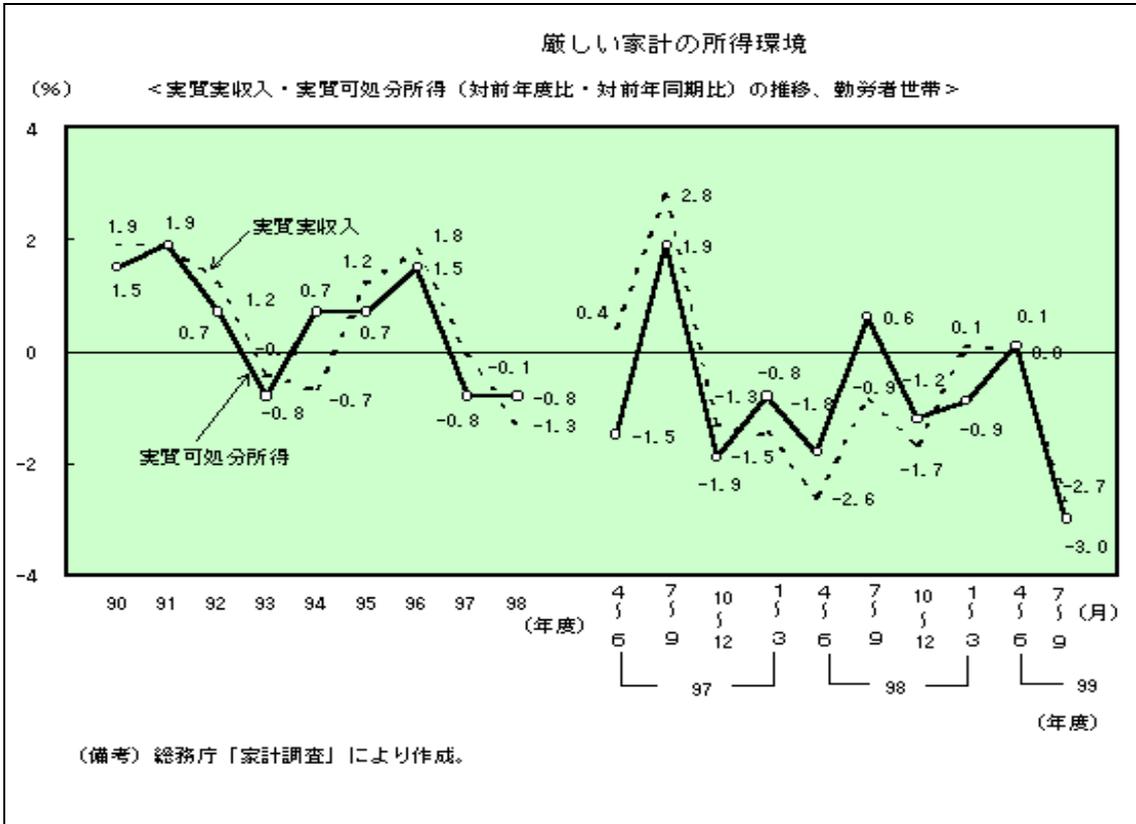
バブル経済が崩壊し、企業財務の悪化し、企業の不況感（財務逼迫、過剰設備）が社会を覆った。そして、少子化だけでなく若者の仕事が少なく失業者も増え、独立世代人口は減少傾向へ反転している。その結果、リストラ解雇→就業者減→人件費減デフレ・スパイラル＝価格破壊の連鎖で日本は長期不況となった。しかし、ゆとりのある層を中心に、消費、住宅着工は意外にも堅調で、平成5年（93）にはマンション・ブームが起こっている。

その中で、「社会、経済の規制は原則廃棄。市場競争を激化させ、ニュービジネスが勃興することで大量の雇用が創造される。」と「平岩レポート」が出るが、国際化の波に巻きこまれ金融破たんが起こっている。企業のリストラが本格的に始まり、平成5年の連合調査では、「もはやサラリーマンの会社への忠誠心は無くなった」とまでいわれた。資産の減少、所得の伸び悩みなどから消費抑制が始まる。百貨店やスーパーなどの売り上げが前年をすまわり続けた。

年 代	平成2年（1990）～平成11年（1999）
	40歳～49歳／育児期後期（子供の教育）
生活基盤	「バブル経済」と「バブル崩壊」（平成2年） *土地価格下落、資産価値低下、リストラ進行
ライフステージ&スタイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「75～76年生まれ」の兄弟姉妹数は2.39人（長男、長女の一人子の時代）</li> <li>・家族の役割として「互いに助け合い、支え合うこと」を重視</li> <li>・親の7割程度は子供を育てることを「楽しみ、喜び」と感じている（マイホームパパ）</li> <li>・一方、「会社人間」も多く、例えば、単身赴任の中年世代でその数も増加</li> <li>・子供のしつけや子供の勉強をみることについて父親の役割は低くなった</li> </ul>
団塊世代が牽引した商品・市場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バブル経済の影響で、高額大型消費を楽しんだ団塊世代であったが、90年以降のバブル崩壊で消費を抑制</li> <li>・子供の教育費、交通費、通信費などに消費のウエイトがかかるようになった</li> <li>・大型店に変わって、コンビニエンスストア、ディスカウントストア、通信販売など比較的新しい販売形態が出現</li> <li>・しかし、団塊世代は、新しい販売形態に馴染まず、スーパーやデパートを利用</li> <li>・親と子供の消費スタイルに「世代格差」が生じてきた。</li> </ul>

**コラム**

厳しい生活が待っていたバブル崩壊以降の約10年間、広がる日米金融資産格差



## コラム

平成 10 年  
国民生活白書  
「中年」その不安と希望  
平成 10 年 12 月  
経済企画庁

近年、生活に不安を感じる人が増えており、特に、日本社会の中枢を担う中年世代までが不安を感じ始めている。その不安は、景気が低迷し、雇用情勢が厳しいことによって強められていると考えられるが、上記のような人口の大きな変動に伴う社会経済の変化やそれに伴う生活上のリスク、先行きの不透明さが、その不安の底流にあるとみられる。(国民生活白書からの抜粋)

### ▼結婚年表／揺れる結婚、男女関係

H2	成田離婚増える 谷村志保『結婚しないかもしれない症候群』刊 天皇家の二男礼宮文仁親王・川嶋紀子さん
H3	イギリスダイアナ皇太子妃、別居 純愛ソングブーム (KAN『愛は勝つ』小田和正『ラブストーリーは突然に』沢田知可子『会いたい』等ヒット)
H4	冬彦さん (TVドラマ『ずっとあなたが好きだった』の佐野史郎が演じた役) マザコンの代名詞に 女子大生就職氷河期
H5	「雅子さん現象」外交官小和田雅子さん、皇太子・小和田雅子さん結婚式 職業を持つ女性が人口の5割を超える 恋愛支援雑誌『XY』(ゼクシィ) 創刊
H6	『マディソン郡の橋』ブーム。 理想の夫婦 (MORE・五十嵐淳子&中村雅俊・山口百恵&三浦友和)

### ▼結婚年表／ジミ婚時代・

H7	イギリス皇太子・ダイアナ妃、離婚
H8	山口智子・唐沢寿明、ハデ婚からジミ婚へ (入籍、あるいは身内の式だけ)
H9	「リストラ離婚」の言葉生まれる、渡辺淳一『失楽園』刊 不倫ブーム 安室奈美恵、SAM入籍、20代に「結婚したい」「子どもがほしい」現象。
H10	「友達みたいな夫婦が理想」、女性の仕事、趣味や交友関係を理解してほしい 30代「結婚しても今の生活レベルを落としたい」男性78.3%、女性88.3% (ダ・カーポ)、公務員が一番人気。 パートナー型の結婚 独身女性の求める結婚相手は3C (厚生白書) 「Comfortable (十分な収入)、Communicative(理解しあえる)、Corporative(家事に協力的)

## 6. 団塊世代の“高齢者予備軍期”

### 高齢者予備軍の団塊世代夫婦

#### 就業、年金、健康、老後生活の4大不安が待っている

団塊世代の年齢が50歳台に達したが、日本で初めてのデフレ不況に見舞われる。デフレ不況は、企業の売り上げを減らし業績を圧迫し、コスト減を余儀なくした。その結果、ボーナスや家賃が抑えられ、サラリーマンの所得は横ばいもしくは減少している。今までの企業社会では、50歳代は所得も消費も最高のレベルで推移したが、団塊世代は所得減、消費抑制を強いられている。一方、企業は不良債権の処理や総人件費削減する中で、企業業績は立て直りを見せて、米国や中国の好景気に乗じて自動車などの輸出企業が売り上げ増、設備投資増へと転換している。さらに国内消費需要については、DVD、薄型テレビ、デジタルカメラの新製品が市場に登場し、また、携帯電話・ノートパソコンなどの普及が高まるなど情報化社会への歩みが見え始めた。しかし、少子高齢化が進展し、将来の年金や介護問題への不安が高じ、老後の生活の備えをさらに強化する必要が出てきている。子供たちの独立と、夫婦二人のみの生活という新ライフステージに戸惑う団塊世代が多く見られるようになった。

年 代	平成 12 年 (2000) ～平成 21 年 (2009)
	50 歳～59 歳／夫婦単位の向老期 (子供の結婚、夫婦二人)
生活基盤	<p>「デフレ不況」(平成 12 年～)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 土地価格下落、本格的リストラ進行</li> <li>* 都市再生、居住の「都心回帰現象」</li> <li>* 都心部開発ラッシュ(2003 年問題)</li> <li>* 「地方分権自立」活動の活発化</li> </ul>
ライフ ステージ & スタイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子供の結婚などで親子の同居や異居問題が発生、夫婦二人生活世帯が増え始めた</li> <li>・ 老親の介護の長期化問題も発生</li> <li>・ 「熟年離婚」や「定年離婚」という中高年層の離婚件数は増加</li> <li>・ 同様に、離婚後に再婚する確率は 80 年には離婚経験者の約 40%、95 年には離婚経験者の約 48%</li> <li>・ 成人男女の親との同居問題が発生 (子供の未婚、晩婚化、パラサイト)</li> </ul>
代が牽引 した商 品・市場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 団塊世代の子供たちといわれる「団塊ジュニア世代」(1971～74 年生まれ)が登場</li> <li>・ 携帯電話、パソコンなど情報通信機器は、不況期にもかかわらず、数年の間にめざましく普及</li> <li>・ 団塊の世代が、若者の消費に引きずられる形相を見せている</li> <li>・ 土地や株など資産の減少、所得不安、年金問題、預貯金金利の低下、金融機関の不安など、団塊世代は消費生活意欲が減退</li> </ul>

**コラム** 「離婚、再婚」をタブー視しない中年になった団塊世代夫婦

結婚年代別では、昭和 55 年（1980 年）後半から同居期間の長い夫婦で離婚が増え続け、その後すべての夫婦で増加している。一方、再婚も昭和 45 年（1970 年）以降から増加傾向にあり、1980 年代後半からは全結婚件数の約 2 割が再婚となっている。

・年次別の離婚率（人口千人あたりの離婚件数）でみると、人口の年齢構造、初婚発生数などの影響を含んでいるため注意が必要だが、50 歳時の離婚経験者の割合は、1950 年代後半のコーホート（同年出生の人口集団）で 20%に達すると考えられる。（つまり夫婦の 5 組に 1 組が離婚をする割合）。ただ、この離婚の程度は、ヨーロッパ諸国の 30-40%、アメリカ、スウェーデンの 50%などに比べると依然として低い

▼離婚は中高年齢層が急増中

離婚データ 同居期間別にみた階級別離婚件数・構成割合（平成 13 年）

夫の年齢	総 数	5 年未満	5~10	10~15	15~20	20~	不 詳
総 数	214 142	77 221	49 381	27 421	18 416	30 019	11 684
~19 歳	709	662	.	.	.	.	47
20~24	13 648	12 434	531	.	.	.	683
25~29	38 244	26 123	10 164	290	.	.	1 667
30~34	45 363	19 178	18 554	5 439	173	.	2 019
35~39	33 973	7 983		10 073	3 340	88	1 676
40~44	24 744	3 861	4 271	6 058	7 023	2 142	1 389
45~49	20 219	2 501	2 207	2 681	4 557	7 022	1 251
50~54	18 969	2 211	1 584	1 648	2 186	9 999	1 341
55~59	9 294	1 121	688	683	645	5 426	731
60~64	5 086	643	331	334	292	3 030	456
65~69	2 362	304	149	133	118	1 417	241
70~74	965	126	54	50	43	577	115

\* 夫妻の年齢は別居したときの年齢

▼再婚は増えるばかり

再婚データ 初婚-再婚別・夫妻の組み合わせ別にみた婚姻件数の年次推移（組み合わせ）

初婚・再婚	昭和 45 年	50 年	55 年	60 年	平成 2 年	7 年	12 年	13 年
夫妻とも初婚	914 870	822 382	657 373	613 387	589 886	646 536	630 235	623 514
夫初婚妻再婚	28 913	33 443	33 512	32 854	35 567	40 631	47 939	51 256
夫再婚妻初婚	52 846	49 063	44 042	43 222	47 586	53 622	61 272	64 169
夫妻とも再婚	32 776	36 740	39 775	46 387	49 099	51 099	58 692	61 060
再婚計	114 535	119 246	117 329	122 463	132 252	145 352	167 903	176 485

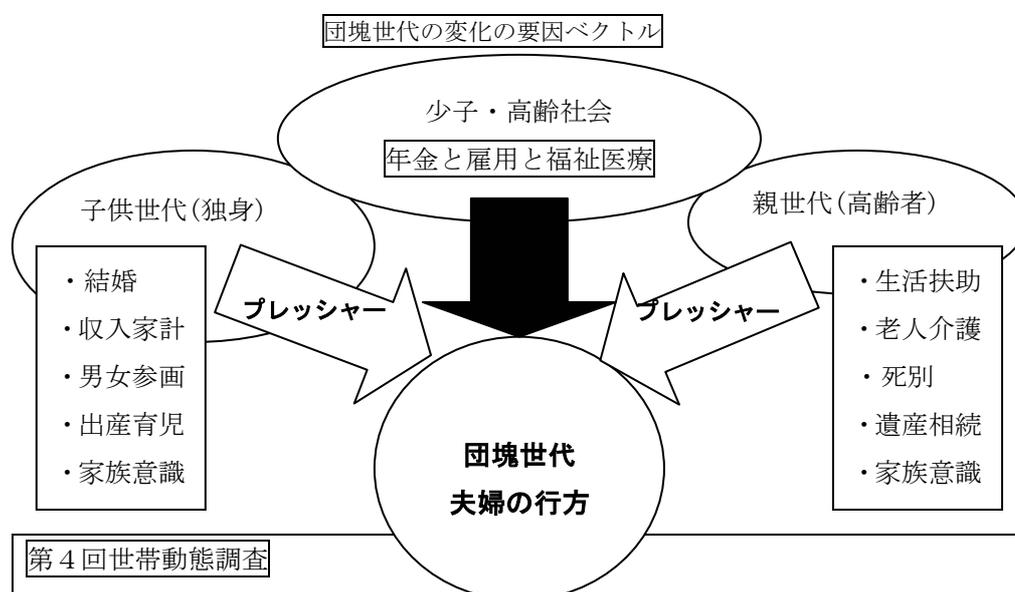
### Ⅲ・団塊世代の夫婦の現在と変化の方向

## はじめに

過去数十年の間、わが国ではきわめて重大な人口学的変化が進行している。

①死亡率の低下、②平均寿命の伸長、③出生率の低下、④高齢化、⑤晩婚化・未婚化、⑥離婚率の上昇といった変化は、世帯の規模と構成、形成過程と解体過程に大きな影響を与えた。

増加する高齢者人口の家族関係と世帯構成の変化、ひとり親と子から成る世帯の増加、未婚のまま親と同居を続ける若・中年層の増加などは、団塊世代の夫婦の行方に重大な影響を与える。また、団塊世代夫婦の行方については、現在の夫婦の価値観・意識だけでなく、子供の世代(団塊ジュニア)や老親の価値観や意識によっても大きく左右される。



### 第4回世帯動態調査

○世帯変動の現状を把握し、また将来の動向を予測するための基礎データを得ることを目的として、5年ごとに「世帯動態調査」を行っており、平成11(に第4回目の調査。

○調査期日：1999年7月1日

### 第2回全国家庭動向調査

○家庭機能の変化の動向や要因を正確に把握するため、家庭の出産、育児環境、老親扶養環境の現状、家族関係の実態を明らかにすることを目的としている

○調査実施時期 1998年7月1日(5年毎調査)

○調査対象 全国の全ての世帯の有配偶女子(妻がいない世帯は世帯主を対象)

### 第12回出生動向基本調査(「夫婦調査」「独身調査」)

○結婚と出産に関する全国調査(調査期日：2002年6月1日)

○出生動向基本調査は5年ごとに実施されている全国標本調査

以下、団塊世代夫婦の生活と意識を国立社会保障・人口問題研究所の資料によって検証してみる。(使用データ・参考資料は上記表)。

## 1. 団塊世代夫婦世帯の実際～形成拡大と解体の方向性～

現在の世帯規模・世帯構成に加え、過去5年間の世帯主経験、親元からの離家、配偶関係の変化等の世帯形成・解体行動について（「第4回世帯動態調査・1999年7月実施」から）

### 1) 世帯の現状

この5年間に小家族化・核家族化が進んだ（前回と比較すると、平均世帯規模は3.1人から2.9人へと減少、単独世帯の割合は18.9%から19.8%、核家族の割合は60.8%から62.5%へとそれぞれ上昇。

### 2) 親族との居住関係

[子との居住関係] ⇒ 基本の流れは別居が主流。

- ①65歳以上の高齢者で子をもつ人の割合は92.6%（前回は94.1%）。
- ②18歳以上の子と同居する人の割合は52.1(58.3)%でいずれも前回に比べ低下
- ③年齢別にみると、男子70-74歳、女子65-69歳で最も同居率が低く、高齢になるほど同居率は上昇。しかし、ほぼ全年齢層で同居率は低下している。
- ④18歳以上の子との同居率は60歳まで60%を維持、60歳以上の同居率は50%を切る。
- ⑤65歳以上の高齢者の息子との同居率は38.0(41.2)%、娘との同居13.2(10.6)%で、前回に比べると娘との同居率は増加。
- ⑥子と同居している高齢者のなかでの娘との同居の割合は25.4(18.8)%である。
- ⑦子との同居を「継続同居」と「再同居」に分けると65歳以上では継続同居より再同居が多い。

⇒ 子供の未婚・晩婚化で40%台は維持。息子との同居が多いが、娘との同居が増えている。（パラサイト現象、親子相互の仲良さ同居の増加）

⇒ 配偶者との離・死別により、継続同居から再同居へシフトする傾向

■ 18歳以上の子との同居率・別居率（%）

□ は団塊世代の世帯

	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳
同居	64.1	60.7	49.5	45.6	46.5
別居	18.2	30.4	41.9	46.0	45.1
18歳以上の子なし	17.7	8.9	8.6	8.4	8.4

[親との居住関係] ⇒老人の老人介護は深刻

- ①18 歳以上人口のうち、自分の親が少なくとも 1 人生存している人は、68.1(64.1)%である。65 歳以上でも 8 人に 1 人程度(13.3%)は、親(配偶者の親を含む)が生存している。
- ②18 歳以上の人で、自分の親と同居している人の割合は男子 32.8%、女子 22.0%である。年齢別にみると、20-24 歳では男女とも 80%弱であるが、30-34 歳では男子 39.0(41.2)%に対し、女子は 22.9(21.5)%と結婚を契機として急減し、30 歳を境にして男女で差がみられる。
- ③同居率は加齢とともに減少するが、65 歳以上でも男子 4.3(3.3)%、女子 1.1(0.8)%が親と同居しており、高齢者が老親と同居する割合は前回に比べやや上昇した。
- ④配偶者の親と同居する者は、男子 4.8(4.0)%、女子 16.3(18.0)%であり、妻が夫の親と同居する割合は前回よりわずかに低下している。

⇒自分の親と同居している人の割合は、30-34 歳では男子 39.0(41.2)%に対し、女子 22.9(21.5)%と結婚を契機として急減し、30 歳を境にして男女で差がみられるが、「子離れ・親離れ」は遅れる傾向にある。

[その他の親族との関係] ⇒兄弟が多かった団塊世代

①きょうだい数は、1960-64年出生コーホート以降では漸減傾向にあり、平均きょうだい数は1960-64年生まれで2.52人、1975-79年生まれでは2.38人となっている。

②きょうだい数の減少とともに、男子のうち長男の割合は1960-64年出生コーホート以降では70%前後に達する。また、女子のうち男きょうだいを含まない姉妹のみの女子は1945-49年生まれの25.3%から1975-79年生まれの44.9%まで増加している。

⇒少子化が進み、長男長女時代の団塊世代の息子・娘達が増えている

⇒家族構成が大きく変わり、流動続ける家族団塊世代の家族像

■出生年次別「平均きょうだい数」及び出生年次別「親との続柄」別構成比■

出生年次	平均兄弟数	男		女		
		長男	非長男	男兄弟あり	男兄弟なし	
					長女	非長女
総数	3.21	63.0	37.0	63.6	22.3	14.1
～1924	2.94	84.7	15.3	44.6	43.7	11.7
1925～29	3.77	70.9	29.1	64.0	23.1	12.9
1930～34	4.19	60.1	39.9	70.4	17.8	11.8
1935～39	4.31	52.2	47.8	76.3	13.7	10.0
1940～44	4.12	49.0	51.0	72.7	17.0	10.3
1945～49 (団塊世代)	3.70	51.5	48.5	74.7	15.1	10.1
1950～54	3.28	54.8	45.2	70.8	15.5	13.7
1955～59	2.77	63.2	36.8	61.5	21.7	16.8
1960～64	2.52	68.8	31.2	58.8	25.9	15.3
1965～69	2.44	72.3	27.7	58.2	24.9	17.0
1970～74 (ジュニア)	2.43	69.5	30.5	57.6	23.6	18.8
1975～79	2.38	71.7	28.3	55.1	23.3	21.6

## 2. 家庭機能の変化（出産、育児、老親扶養、夫婦関係など）

国立社会保障・人口問題研究所第2回全国家庭動向調査(1998年7月1日調査)から、世帯の関係がどう変わるのを見る。この調査は、全国の全ての世帯の有配偶女子（妻がいない世帯は世帯主）を対象都市、家庭機能の変化の動向や要因を正確に把握するため、家庭の出産、育児環境、老親扶養環境の現状、家族関係の実態を明らかにすることを目的としている

### 1) 出産、子育て資源としての親との関係

- ①妻 30 歳代までの夫妻の母親は、どちらかがほぼ 100%近く生存している。
- ②同居別居割合は、40 歳代前半の妻までは、別居傾向が強まっており、34 歳までの妻では 8 割程度が別居である。とくに、都市的地域でその傾向が強いが、農村的な地域でも別居が増加している。
- ③別居の場合は、若年世代ほど親の近くに居住する傾向がある。
- ④妻の年齢別に親の介護の要否をみると、39 歳以下の妻では、子育てと介護の両方を担う妻は比較的少ない。
  - ⇒長寿化で、夫妻の母親は存在。(同扶助するか、介護するのかの問題解決、子供の世代は長男長女時代でさらに深刻に)
  - ⇒40 歳まで別居(独立した家計世帯)しており、親の近くに居住する傾向
  - ⇒子育てが終ると「介護」が待っている団塊世代。

### 2) 親からみた成人子との関係

- ①娘と話をする頻度は、結婚後も週 1~2 回以上の頻度で 7 割強が話をしている。
- ②未婚の成人子に対して、男子で 3 割、女子で 4 割が生活費などの経済的支援をしている。何らかの経済的支援は、結婚後もかなり高い割合で続いている。
- ③結婚している娘に対しては、出産や孫の世話で 3 分の 2 が援助をしている。
- ④同様に、結婚している娘に対して、悩み事の相談相手になっている母が 4 割弱おり、結婚後も母娘の緊密な関係がうかがえる。
  - ⇒母と娘との緊密な関係が、結婚後も続く(娘がいる世帯といない世帯で大きな差異)
  - ⇒経済的支援、出産や孫の世話でつながる親と子の絆

### 3) 夫婦の役割関係

#### ①妻の家事時間と夫妻の家事分担度

- ・妻の家事時間は、平日、休日とも30歳代の妻がもつとも長い。
- ・フルタイムで働く主婦で、平日の家事時間が4時間以上もほぼ3割いる。
- ・妻がフルタイムで働いていても、夫の3割弱は全く家事をしない。

⇒経済的補助負担、家事負担増で家庭内での妻分担が大きくなり、妻の反乱が確実に

⇒職住近接の住まい、頼れる人（親）との隣接・近居が条件に

#### ②妻の育児分担度

- ・子どもが1歳未満でも、育児は8割が妻に集中、夫の1割は全く育児をせず。

⇒自分の母親に援助を求める(三世代家族メリット追及、近隣別居が増加)

#### ③夫の育児参加の実態と変化 と妻の評定

- ・「寝かしつける」では6割、「食事をさせる」「おむつを替える」などの育児では、夫のほぼ半数がほとんど行っていない。
- ・夫の家事、育児に対する妻の評価は、多少の遂行率の上昇にも関わらず、否定的態度が1割増加している。
- ・夫に対する家事、育児への期待度はわずかであるが増加し、妻の要求水準が上がったことにより、夫の遂行率はわずかに上昇したが妻の満足度は低下。

⇒家庭を粗末にする夫と家庭を大切にすの夫の考え・姿勢は、今後の夫婦の形が大きく変わる可能性が大（我慢できない妻。家庭別居、熟年離婚・別居の増加傾向

### 4) 夫婦間のコミュニケーション

#### ①夫婦間のコミュニケーション

- ・夕食をいつも一緒にする夫婦は7割を越えるが、30歳40歳代の主婦の家庭では6割前後しかない。よく心配や悩み事を夫に相談する妻は40歳代で、3人に1人程度。

⇒コミュニケーションは良好だが本質的問題は避ける(友達仲間意識)

## ②夫婦の裁量権

- ・家庭内の裁量権は妻が持つ場合が多く、夫が寄与する割合は小さい。
- ・家計の分配や管理・運営は妻が主に行う割合が7割を占めている。また、育児や子どもの教育についての決定を、主に夫が行う家庭はほとんどない(3.6%)。
- ・妻が自分の親と同居している場合裁量権が大きく、夫の親と同居している場合は小さくなる。
- ・子供の教育については同居同状況関係なしに妻の裁量権は高い。  
⇒責任感のある女性・仲良くやろうとする男性(団塊世代)、一緒(若い世代)

### ■夫婦における裁量権 (%)

	妻	一緒	夫
車や耐久消費財など高価なものの購入	11.6	48.6	39.8
家計の分配や管理・運営	58.6	18.1	13.1
親や親族とのおつきあい	35.4	52.6	11.9
育児や子供の教育	53.5	43.0	3.5

## 5) 母親の働き方の「現実と理想」

①もっとも多いのは、再就職型の5割で、専業主婦型2割、DINKS型は少ない。

②理想でも、似通った割合。理想と現実の一致度がもっとも高いのは、再就職型。

⇒高学歴化とともに専業主婦化の後退と働く女性志向の強まり

## 6) 家族に関する妻の意識

### ①夫婦に関する規範意識

・専業主婦の妻は、夫には「稼ぎ手役割と家庭役割」の両方を望み、自分自身は「家事や育児の専従者」からの回避といった態度がうかがえる。

・20歳代の妻では、子どもを持つこと＝社会的認知に対して8割近くが否定的態度、60歳代とは35%の開きがみられる。

### ②子どもに関する規範意識

・乳児期における母親の育児専念に関しては、約9割という圧倒的な支持を得ている。

### ③老親に関する規範意識

・「年をとった親夫婦は息子夫婦と一緒に暮らすのがよい」に対して、否定的態度が1割増加している。

⇒崩れる家庭に関する規範(崩してきた団塊世代は戸惑い状態)

### 3. 家族・世帯が抱える課題

#### 1) 「親世帯からの離家」⇒親離れしない子供達

- ①女子 25-29 歳では、親元に残る割合がこの 5 年間に 46.2%から 51.3%へ約 5 ポイント上昇している。
- ②最初の離家年齢は、男子では 1945-49 年生まれ(20.2 歳)、女子では 1950-54 年生まれ(20.8 歳)を底として、それ以降の出生コーホートでは上昇している。
- ③高学歴化によって、最近では、進学離家、就職離家が拮抗しているが、進学離家の割合は 1960 年出生コーホート以降は頭打ちになっている。

#### 2) 「結婚」⇒子供の晩婚と未婚で悩む団塊世代夫婦

- ①この 5 年間に、女子では 20 代後半から 30 代前半の未婚割合が 4~5 ポイント上昇しており、晩婚化が顕著である。  
⇒若い時期 20 歳台前半から「離家」した団塊世代に対して、その子供達は「離家」が遅れており、「家」に対する意識が大きく変わってきている。世代ギャップが今後の団塊夫婦の行方に大きな影響を与える。  
⇒継続同居なのか離居なのか、親の「子供に対する」考え方・意識、子供の「親に対する」考え・意識が今後の団塊世代夫婦の選択を左右する。

■平均「離家」年齢の推移及び「そのきっかけ・契機」比率

出生年次	男					女				
	離家 年齢 (歳)	きっかけ構成比 (%)				離家 年齢 (歳)	きっかけ構成比 (%)			
		入学 進学	就職 転勤	結婚	その 他		入学 進学	就職 転勤	結婚	その 他
~1924	20.2	10.7	40.8	22.2	26.3	20.5	3.7	17.0	70.4	8.9
1925~29	21.0	14.2	30.4	34.4	20.9	21.4	4.9	17.2	71.0	6.9
1930~34	22.3	10.2	41.3	32.0	16.6	22.0	3.5	15.8	73.1	7.6
1935~39	21.1	12.8	45.8	31.1	10.4	21.9	5.3	21.2	67.4	6.1
1940~44	20.3	11.1	55.6	24.6	8.7	21.1	5.8	30.5	59.5	4.2
1945~49 (団塊世代)	20.2	23.0	45.0	23.1	8.9	21.1	9.4	30.8	54.6	5.1
1950~54	20.4	27.7	43.6	19.4	9.2	20.8	15.0	28.3	51.8	5.0
1955~59	20.8	33.3	34.2	21.6	10.9	21.5	20.8	17.9	56.2	5.0
1960~64	21.1	33.2	29.0	25.5	12.3	21.9	20.6	18.2	54.6	6.7
1965~69	20.4	35.1	32.0	20.7	12.3	21.8	21.0	17.1	51.3	10.6

### 3) 「ライフコース」から見た世帯形成

- ①30代以降では男女とも多数が離家、結婚、出生を経験するが、離家せずに結婚、出生する世帯形成パターンは男子に多く、30代後半では15.9%を占める。
- ②今回の調査から仮想コーホートの世帯形成行動を予測すると、将来の35-39歳女子が親元にとどまる割合は現在より高くなる可能性がある。  
⇒離家しない30代男性、30代後半女性が増える(長男・長女時代の影響など)

### 4) 団塊世代夫婦の解体と縮小

#### [配偶者との死別・離別]

- ①5年前の配偶関係が有配偶であった者のうち、65歳以上では男子3.4%、女子16.7%が死別へと変化。
- ②夫婦のみの世帯で一方が死亡した場合、9割以上は単独世帯に移行している。
- ③男子では夫婦のみの世帯や夫婦と子の世帯から「単独世帯」への移行が多く(16.9%、12.4%)、女子では夫婦と子の世帯から「女親と子の世帯」への移行が全体の37.5%を占める。  
⇒夫婦のみの世帯は、離別や死別によって、男子は単独世帯へ女子は「女親と子の世帯」へ移行

#### [子の離家とエンpty・ネスト]

- ①継続世帯では、5年間に夫婦と子の世帯から夫婦のみの世帯へ移行した世帯は9.8%であった。このエンpty・ネストへ移行する割合は60代世帯主で20%を超える。
- ②子をもつ人のうち、すべての子と別れて暮らしているエンpty・ネスト期の人は24.5%である。この5年間にこの状態に移行した人は7.5%であり、年齢別には男女とも50代後半がもっとも多い(男子15.1%、女子14.3%)。  
⇒「夫婦のみの世帯」が主流になる。

#### [高齢者の健康状態と同居相手]

- ①要介護の高齢者の属する世帯は、単独世帯、夫婦のみ世帯は少なく、その他の世帯が多い。
- ②子と同居している高齢者について、介護の要・不要別に、同居子に離家経験のある者の割合をみると、男女とも要介護高齢者のほうが高く、男子で11.3ポイント、女子で5.7ポイントの差がある。  
⇒介護から派生する「再同居」が、団塊世代夫婦において大きなテーマになる

## IV・団塊世代夫婦の今。その実態と意識

### ●「団塊世代夫婦意識調査」

調査対象：、全国・昭和22年～昭和24年産まれの既婚男女。

300サンプル（男女各150サンプル）

調査実施日：平成15年12月13日（土）～12月14日（日）

調査方法：インターネットリサーチ

### ●まとめ

I／団塊世代夫婦のプロフィール

II／団塊世代夫婦の実生活

III／団塊世代夫婦の生活意識

IV／団塊世代夫婦の夫婦関係

V／団塊世代夫婦の不安

## I / 団塊世代夫婦のプロフィール

### プロフィール① 年齢、結婚、職業

恋愛結婚の夫婦は約 7 割、見合い結婚でも夫婦約 3 割。  
 団塊世代夫婦は恋愛からスタート。

- ①世帯主年齢は 55～57 歳（2004 年現在）。配偶者は夫より 2～3 歳年下、ほぼ同世代同士の夫婦。
- ②結婚は、恋愛結婚が多いが、女性は 70%の人が恋愛結婚、男性は 65%で、恋愛結婚は女性のほうが多い。
- ③見合い結婚は男性 31%、女性は 27%で、団塊世代は、旧制度的な要素を抱え込んでおり、団塊世代夫婦は、必ずしも、全てにおいて現代的な生活価値観・スタイルを持っている訳ではない。

#### ■調査サンプル・生年、結婚状況、職業

	サンプル	生年(平均)	配偶者生年	年齢差(歳)	結婚状況(%)		
					恋愛結婚	見合い結婚	その他
計	300	1948. 06 年	1948. 17 年				
男性	150	1948. 06 年	1950. 34 年	-2.28 歳	65.3	31.3	3.3
女性	150	1948. 05 年	1946. 00 年	2.05 歳	70.0	26.7	3.3

職業	男性	女性
・会社員・公務員・団体職員などの勤め人	71.3	10.7
・自営業・自由業	22.7	3.3
・主婦(パート・アルバイトを含む)	—	78.7
・男性のアルバイト・パート	1.3	—
・無職	3.3	4.0
その他	1.3	3.3

- ④夫が会社員・公務員などの勤め人が妻は主婦（パート・アルバイトを含む）という夫婦が約 70%となっているが、自営や自由業の世帯は約 23%、リストが進行中のため無職も 5%弱おり、全てが典型的なサラリーマン世帯ではない。定年へ向けての準備期間・モラトリアム期。

## プロフィール② 同居家族

「ペット」との同居は20%を超える！ペットは家族の拠り所。  
 家族はそれぞれの孤独感をペットに託す。

- ①配偶者との同居は97%（単身赴任など調査対象外）
- ②子供との同居は、息子と同居、娘との同居がそれぞれ4割程度であるが、男性の団塊世代は「娘との同居」比率が高く、女性のほうは「息子との同居比率が高い。
- ③団塊世代の年齢（55歳）ともなると、子供達が結婚して別居することも多く、現在、子供との同居は、「夫婦二人に子供ひとり」というケースが大半を占める。
- ④団塊世代は、兄弟も多く、次男・三男坊、次女・三女であることが多かったためか、また、地方出身者が多いせいなのか、現在「親との同居」は全体の1割程度でしかない。但し、「自分の親との同居」に限れば、男性の団塊世代は、女性よりも多く、また、女性は「配偶者の親との同居」が多くなっている。親世代の長寿化が進行する中、今後どちらの親と同居するのか大きな問題となりそうである。団塊世代の現在は、親と同居する状況・環境にあるわけではない
- ⑤また、結婚しない子供達がいる、夫との相手、あるいは妻との相手地なるのに疲れた夫婦にとって、家族として重きを置かれるのが「ペット」である。団塊世代夫婦の24%、約4分の1が「ペット」と同居している。女性のほうにその傾向は強い。
- ⑥「孫との同居」については、女性のほうが、男性より早く結婚しているためか、団塊女性の夫婦は、団塊男性の夫婦を上回る。

■同居家族	平均	男性	女性
配偶者	97.3	97.3	97.3
子供(息子)	43.7	44.0	43.3
子供(娘)	43.0	50.7	35.3
自分の親	11.7	12.7	10.7
配偶者の親	6.7	4.7	8.7
孫	1.7	0.7	2.7
兄弟・姉妹	0.3	0.7	—
祖父母	—	—	—
親類・親戚	0.3		0.7
ペット	24.3	22.0	26.7
その他	0.7		1.3

### プロフィール③ 個人所有状況

個人所有にこだわる団塊世代の男性。  
男性にはモノを個人所有として与えておけば家庭は安泰！

- ①夫婦で個人所有となっているものは、第一位パソコン（所有率 77.3%）と第二位携帯電話（同 73.7%）が 70%を超え、個人商品・通信機器パーソナル商品ならではの保有率の高さとなっている。
- ②所有率 30%台の第二グループには、書斎・自分の部屋（41.9%）、テレビ（35.3%）、自家用車（35.3%）が上がってくる。
- ③女性の個人保有商品は、男性の個人所有率を大きく下回るが、「主人のものを利用すればよい」というところで主人に花を持たせているように思われる。

■個人所有状況	平均	男性	女性	男女差
①パソコン	77.3	88.0	66.7	21.3
②携帯電話	73.7	84.7	62.7	22.0
③書斎や自分の部屋など	41.3	52.0	30.7	21.3
④テレビ	37.3	44.7	30.0	14.7
⑤自家用車	35.3	47.3	23.3	24.0
⑥オーディオ	27.7	38.0	17.3	20.7
⑦ビデオ・DVD	26.0	34.7	17.3	17.3
⑧この中にはない	4.0	—!	8.0	—

## Ⅱ／団塊世代夫婦の実生活

### 夫婦の生活① 寝室状況、金銭管理

夫婦の「クウネル」（食う・寝る）をリードする団塊世代の女性達。  
実権を握る団塊世代の奥様達。孤独なご主人。

#### 寝室状況—団塊男性は孤独な眠りに入る。

夫婦同室が 64.3%、夫婦別室が 35.7%。6 割が同室、4 割弱が 4 割となっているが、男性のほうが「別室」と答えたのが女性よりも 6%ポイント多い。

#### 金銭管理—実権を握る団塊世代の奥様達。但し、一部の男性は抵抗する。

金銭管理は、奥様が 71%、ご主人が 23%と、奥様が圧倒的に多い。但し、男性が団塊世代である夫婦は、ご主人本人が 31%、奥様が 63%となり、男性が団塊世代である夫婦は、より奥様の金銭管理比率が高くなる。

■寝室状況・金銭の管理 理者	寝室状況		金銭の管理者		
	夫婦同室	夫婦別室	ご主人様	奥様	その他
平均	64.3	35.7	23.3	71.3	5.3
男性	61.3	38.7	31.3	62.7	6.0
女性	67.3	32.7	15.3	80.0	4.7

### 夫婦の生活② 配偶者への呼び方

「パパ、ママ」より、「お父さん、お母さん」の団塊夫婦。  
名前や愛称で配偶者を呼ぶ友達の夫婦も 25%に。

男女とも『お父さん』や『お母さん』が最も高かったが、夫から妻に対しては『おい』や『ねえ』などの言葉が多く挙げた。一方、妻から夫へは「あなた」が特徴的であった。

	あなたから配偶者へ				配偶者からあなたへ			
	平均	男性	女性	差異	平均	男性	女性	差異
「お父さん」や「お母さん」	38.0	30.0	46.0	16.0	41.0	47.3	34.7	-12.7
名前と呼んでいる	19.0	26.0	12.0	-14.0	15.7	15.3	16.0	0.7
「おい」や「ねえ」など	14.0	19.3	8.7	-10.7	12.3	5.3	19.3	14.0
「パパ」や「ママ」	9.7	9.3	10.0	0.7	11.3	12.0	10.7	-1.3
「あなた」	7.3	2.0	12.7	10.7	6.7	11.3	2.0	-9.3
愛称	5.7	6.0	5.3	-0.7	5.0	4.0	6.0	2.0
その他	4.3	4.0	4.7	0.7	6.3	4.7	8.0	3.3
「おまえ」	2.0	3.3	0.7	-2.7	1.7	—	3.3	3.3

### 夫婦の生活③ 夫の家事状況

胸を張ってという程でもない夫の家事手伝い。やはり、「家事は主婦の仕事」なり！  
子供の頃の「掃除嫌いが」が大人になっても治らない？

- ①の家事状況を見ると、全般的にあまりしていない。やっていることで上がってくるのは、「ゴミを出す」(34.7%)、「布団の上げ下ろし」(30.3%)が第一位、第二位に上がる。
- ②「浴室の掃除」「庭の掃除」「換気扇掃除」が20%台となり、後は押して知るべし。
- ③年齢50歳を過ぎれば、もっと主婦の手助けをするのかと思いきや、ますます遠ざかる。これまでも今でも会社人間であったために、家事のことは主婦にまかせっきり。これからはといっても、手助けノウハウもわからないというのが現況。
- ④問題なのは、男性本人が頑張っている家事については、女性の方がほとんど評価していないことが浮き彫りになっている。男性はやっているつもりだが、男女差が10%ポイントもの差が出てきている。今後の二人の生活に暗雲が広がりそうだ。

■夫の家事状況	平均	男性	女性	男女差
①ゴミを出す	34.7	36.7	32.7	4.0
②布団の上げ下ろし・ベッドメイキング	30.3	40.0	20.7	19.3
③浴室の掃除	29.3	32.0	26.7	5.3
④庭の掃除・草取り	29.0	30.7	27.3	3.3
⑤換気扇の掃除	24.0	32.7	15.3	17.3
⑥日常の買物	19.0	25.3	12.7	12.7
⑦部屋の掃除	18.0	22.7	13.3	9.3
⑧窓ガラス磨き	16.0	20.7	11.3	9.3
⑨食事の後片付け	15.7	21.3	10.0	11.3
⑩ペットの世話	15.0	15.3	14.7	0.7
⑪靴磨き	13.0	14.0	12.0	2.0
⑫朝食のしたく	7.7	5.3	10.0	-4.7
⑬夕食のしたく	7.0	10.7	3.3	7.3
⑭洗濯	6.0	8.0	4.0	4.0
⑮その他	6.0	6.7	5.3	1.3
⑯アイロンがけ	5.7	5.3	6.0	-0.7
⑰子育て	4.7	6.7	2.7	4.0

#### 夫婦の生活④ 夫婦の行動

一緒に行動は、最低「食事と冠婚葬祭だけは」する、趣味や買物などは別々に！  
 「帰省」は約40%、「初詣」は約25%が「行動自体行わない」に。  
 映画も買物も一緒に行動したがる男性、嫌がる女性。男性は気が付かない

- ①夫婦で一緒に行うことが多い行動としては、男女とも「外食をする」(男性：78.7%、女性：77.3%)、「墓参りをする」(男性：74.7%、女性：70.0%)、「晩ごはんを食べる」(男性：73.3%、女性：72.0%)が上位を占めた。
- ②夫婦の行動で、「この行動自体行わない行動として高いポイント上げたのが、「帰省」(39.3%)、「初詣」(24.7%)。加えて、「墓参り」(12.3%)が上がっている。若い時は帰省や墓参りなどもしたと思われるが、50歳代の初老夫婦に帰るところはなくなったのかもしれない。自分の「家」を作ってきた団塊夫婦は、やっと旧き家との決別の時期を迎えたということか。

■一緒に行うことが多い行動		■別々で行うことが多い行動		■この行動自体行わない	
①外食をする	78.0	①音楽を聴く	56.0	①帰省する	39.3
②晩ごはんを食べる	72.7	②買物・ショッピングをする	46.0	②映画鑑賞や観劇をする	31.7
③墓参りをする	72.3	③テレビを見る	43.0	③初詣する	24.7
④1泊以上の旅行に行く	67.0	④朝ごはんを食べる	37.0	④音楽を聴く	22.7
⑤初詣する	66.0	⑤映画鑑賞や観劇をする	34.7	⑤1泊以上の旅行に行く	17.3
⑥休日に出かける	64.0	⑥休日に出かける	32.7	⑥墓参りをする	12.3
⑦朝ごはんを食べる	59.3	⑦晩ごはんを食べる	27.0	⑦外食をする	6.3
⑧テレビを見る	55.3	⑧帰省する	17.0	⑧買物・ショッピングをする	4.0
⑨買物・ショッピング	50.0	⑨1泊以上の旅行に行く	15.7	⑨朝ごはんを食べる	3.7

- ③男女によって意識に差が見られる行動としては、「買物・ショッピングをする」、「日帰り旅行に行く」、「1泊以上の旅行に行く」が挙がり、それぞれ男性の意識の方が10ポイント以上高くなった。

■夫婦別々で行うこと	男女差	男性	女性				
①映画鑑賞や観劇をする	-18.7	25.3	44.0	⑦晩ごはんを食べる	-2.0	26.0	28.0
②買物・ショッピングをする	-17.3	37.3	54.7	⑧初詣する	-1.3	8.7	10.0
③1泊以上の旅行に行く	-10.0	10.7	20.7	⑨外食をする	-0.7	15.3	16.0
④テレビを見る	-6.0	40.0	46.0	⑩帰省する	0.7	17.3	16.7
⑤朝ごはんを食べる	-6.0	34.0	40.0	⑪音楽を聴く	4.0	58.0	54.0
⑥墓参りをする	-2.7	14.0	16.7	⑫休日に出かける	6.7	36.0	29.3

## 夫婦の生活⑤ 商品の決定者

夫が決めることは、男性では「パソコン」、「クルマ」。  
妻が決めることが多い事項は、「休日の夕食のメニュー」。

- ①夫が決めることが多い事項は、男性では「パソコンのメーカー・機種選定」(97.3%)が最も多く、以下「テレビやオーディオのメーカー・機種選定」(79.3%)、「クルマのメーカー・機種選定」(72.0%)が続いた。全般的に男性において、ほとんどの事項を男性が決めていると認識している傾向となった。
- ②妻が決めることが多い事項は、男女とも「休日の夕食のメニュー」(男性:74.7%、女性:72.7%)が最も多かった。女性では「パソコンのメーカー・機種選定」(44.7%)、「金融商品の選定」(39.3%)が続いた。女性の方も男性よりも程度は低いものの男性同様、全般的にほとんどの事項において女性の方が決めている認識している傾向が窺えた。消費については互いに気遣う「いい夫婦」であり、気分的に、若い時代と大して変わらない。

■商品選定の決定者(決めることが多い人)	ご主人様	奥様
①パソコンのメーカー・機種選定	①64.3	22.3
②クルマのメーカー・機種選定	②61.0	7.0
③テレビやオーディオのメーカー・機種選定	③59.3	18.3
④ご主人様の背広や靴の選定	④50.3	④28.3
⑤視聴するテレビのチャンネルの選択	⑤41.3	③28.7
⑥休日の過ごし方	26.0	18.0
⑦旅行の行く先・宿泊場所	24.7	⑤24.7
⑧リフォームや転居など	20.7	19.0
⑨映画やレンタルビデオで何を見るか	19.0	21.3
⑩外食する際の店	16.7	②35.3
⑪休日の夕食のメニュー	4.0	①73.7

### ■夫婦で相談して決める事柄

①リフォームや転居など	53.0	⑦休日の夕食のメニュー	21.0
②休日の過ごし方	44.7	⑧テレビやオーディオのメーカー・機種選定	20.7
③旅行の行く先・宿泊場所	43.7	⑨ご主人様の背広や靴の選定	20.7
④外食する際の店	42.7	⑩視聴するテレビのチャンネルの選択	19.7
⑤映画やレンタルビデオで何を見るか	30.7	⑪パソコンのメーカー・機種選定	10.0
⑥クルマのメーカー・機種選定	24.0		

### Ⅲ／団塊世代夫婦の生活意識

#### 夫婦の生活意識① 家庭意識

「老後の生活」「結婚生活」において男女によって大きな意識のずれ。  
これからの生活に大問題発生の兆し。

- ①男女によって意識に差が見られる項目としては、主に「老後は子供の近くで暮らしたい」（女性の方が14ポイント高）、「無理して結婚生活を続ける必要はない」（女性の方が6ポイント高）が挙げられた。ここには、子離れしない母親像が浮かんでくる。もしくは頼りにできない「夫」像も。
- ②「配偶者から尊敬されていると思う」（男性の方が15ポイント強高）が挙がり、男性を立てる女性と女性を立てられない男性など、古めかしい夫婦像が底辺に見られる。
- ③家庭の状況・意識については、男女とも「子供のしつけは親の責任だと思う」（男性：84.7%、女性：82.0%）が最も多かった。次いで「家族だんらんの時を持つようにしている」（男性：54.7%、女性：53.3%）が続いた。
- ④「子供が希望しなければ大学までいかせる必要はない」については、男性の方が女性よりも5.3%高くなっており、高学歴・高収入という女性の願望は生き続け、男性は諦め気味である。

■家庭意識	平均	男性	女性	男女差異
・子供のしつけは親の責任だと思う	83.3	84.7	82.0	2.7
・家族だんらんの時を持つようにしている	54.0	54.7	53.3	1.4
・親は子供のために財産を残す必要はないと思う	49.7	48.0	51.3	-3.3
・子供が希望しなければ大学までいかせる必要はない	48.7	51.3	46.0	5.3
・子供にも家事の手伝いをさせている	46.0	45.3	46.7	-1.4
●無理して結婚生活を続ける必要はない	44.0	40.0	48.0	-8.0
●老後は子供の近くで暮らしたい	39.0	32.0	46.0	-14.0
・家族揃ってお祝いをしている	37.7	39.3	36.0	3.3
・月に1回以上は家族揃って外食する	34.7	36.0	33.3	2.7
子・供から尊敬されていると思う	34.3	32.7	36.0	-3.3
●配偶者から尊敬されていると思う	32.3	40.0	24.7	15.3
・休日は家族揃って行動することが多い	31.7	31.3	32.0	-0.7
・夫婦で共通した趣味を持っている	25.7	22.7	28.7	-6.0
・家庭生活は子供中心である	17.7	19.3	16.0	3.3
●老後は高齢者向けの施設で暮らしたい	17.3	14.0	20.7	-6.7
・老後は子供と一緒に暮らしたい	6.3	7.3	5.3	2.0
・この中にはない	0.3	—	0.7	—

### 夫婦の生活意識② 結婚記念日

夫婦とも結婚記念日を記憶している人は、男性で86.0%、女性で75.3%。

男性が女性を上回りそのギャップが課題に。

プレゼントは夫婦ともしない方が多く、必ず「する」は、10%弱。

①結婚記念日プレゼントの授受については、贈答、受領ともにプレゼントはしない（もらわない）が最も多かったが、女性の方が男性よりもその意識は強かった。

■結婚記念日記憶	平均	男性	女性	差異
結婚記念日を覚えている	80.7	86.0	75.3	-10.7

■結婚記念日プレゼント	あなたから配偶者に対して				配偶者からあなたに対して			
	平均	男性	女性	差異	平均	男性	女性	差異
プレゼントをしない	54.3	48.0	60.7	12.7	58.3	56.0	60.7	4.7
しない方が多い	22.3	26.0	18.7	-7.3	18.0	21.3	14.7	-6.7
プレゼントをすることが多い	13.7	17.3	10.0	-7.3	14.3	16.0	12.7	-3.3
必ずプレゼントをしている	9.7	8.7	10.7	2.0	9.3	6.7	12.0	5.3

### 夫婦の生活意識③ 夫婦の誕生日

プレゼント「なし」が「する」を上回る。夫婦互いに「年齢」の話は避ける。

①互いの誕生日を記憶している人は、男性98.0%、女性88.0%で、男性が10%上回る。

②女性の方は、プレゼントを贈答していることにより誕生日に対し強い意識を持っている傾向が見受けられた。

■夫婦間の誕生日記憶	平均	男性	女性	差異
お互いの誕生日を覚えている	93.0	98.0	88.0	-10.0

■誕生日プレゼント	あなたから配偶者に対して				配偶者からあなたに対して			
	平均	男性	女性	差異	平均	男性	女性	差異
プレゼントしない方が多い	31.3	34.0	28.7	-5.3	30.3	20.7	40.0	19.3
プレゼントをしない	24.3	24.0	24.7	0.7	26.0	28.7	23.3	-5.3
することが多い	24.0	24.0	24.0	0.0	26.0	31.3	20.7	-10.7
必ずプレゼントをしている	20.3	18.0	22.7	4.7	17.7	19.3	16.0	-3.3

#### 夫婦の生活意識④ 夫婦生活に対する考え

今後の夫婦生活の考えは、微妙に異なる男女の意見。夫婦の行動やお墓問題は夫婦によって大きく見解が異なる。自由独立志向の女性、優柔不断な男性

**子供との同居** 女性は「子供との同居」を好まない！自信たっぷり。

男女とも「同居はしない」（男性：62.7%、女性：70.7%）が最多だが、男性は「子供が望めば同居したい」（36.0%）も4割弱となった。

■子供との同居について	平均	男性	女性	差異
同居する予定である	3.7	1.3	6.0	-4.7
同居の予定はないが、子供が許せば同居したい	29.7	36.0	23.3	12.7
同居はしない	66.7	62.7	70.7	-8.0

**親との同居** 女性は65%が「親との同居」はしない！「嫌」がる女性。

男女とも「同居はしない」（男性：50.0%、女性：64.7%）が最多だが、男性は「親が望めば同居したい」（32.7%）も3割強となった。

■親との同居について	平均	男性	女性	差異
同居する予定である	17.0	17.3	16.7	0.6
同居の予定はないが、親が望めば同居したい	25.7	32.7	18.7	14.0
同居はしない	57.3	50.0	64.7	-14.7

**夫婦行動** 擦り寄る男性、個人行動の女性

男性では「できるだけ二人で行動している／行動したい」（53.3%）が半数を上回ったのに対し、女性では「個人個人が自由に行動している／行動したい」（55.3%）が半数を超えた。

■夫婦の行動について	平均	男性	女性	差異
できるだけ二人で行動している／行動したい	49.0	53.3	44.7	8.6
個人個人が自由に行動している／行動したい	51.0	46.7	55.3	-8.6

**お墓問題** 自分と子供のお墓がベターの女性。祖先や縁戚を気にする男性。

男性では「ご主人様（自分）の祖先のお墓に入るつもり」（57.3%）が6割弱を占めたのに対し、女性では「ご主人様（夫）の祖先のお墓に入るつもり」と同率で「夫婦と子供の墓を作って入るつもり」（ともに35.3%）も多く挙げた。

■お墓問題	平均	男性	女性	差異!
ご主人様の祖先の墓に入るつもり	46.3	57.3	35.3	22.0
夫婦と子供の墓を作って入るつもり	28.7	22.0	35.3	-13.3
自分だけ別の墓を作って入るつもり	4.0	2.0	6.0	-4.0
墓に入らず散骨するつもり	21.0	18.7	23.3	-4.6

## IV／団塊世代夫婦の夫婦関係

### 夫婦の関係① 満足度

まあまあでお茶を濁すことができるのか、入り乱れる満足と不満

**配偶者への満足度** 女性の満足度は67.4% (10.7%+56.7%) で7割弱となった。配偶者に対する満足度は男性の方が10ポイント以上高い

■配偶者への満足度	平均	男性	女性	差異
非常に満足している	18.0	25.3	10.7	14.6
まあ満足している	55.0	53.3	56.7	-3.4
どちらともいえない	13.3	11.3	15.3	-4.0
やや不満である	7.3	6.0	8.7	-2.7
非常に不満である	6.3	4.0	8.7	-4.7

**配偶者への不満** 「価値観が違う」、「自己中、自分勝手、わがまま、偉そうにする」。

配偶者に対して不満を抱いている41名に対し、不満点を自由回答方式にて尋ねたところ、「価値観・ものの考え方が違う」、「自己中心的、自分勝手、わがまま、偉そうにする」(ともに11票：26.8%)が多かった。次いで「思いやりがない、愛情がない」(7票：17.1%)と続いた。

コード		件数	%
1	価値観・ものの考え方が違う(育った環境・文化が違う)	11	26.8%
2	自己中心的、自分勝手、わがまま、偉そうにする	11	26.8%
3	思いやりがない、愛情がない	7	17.1%
4	家庭に無関心・人任せ(仕事中心)	4	9.8%
5	会話がな、言葉が足りない	4	9.8%
6	経済力がない(過去に金銭面で失敗した)	3	7.3%
7	趣味が合わない	2	4.9%
8	整理整頓ができない	2	4.9%
9	細かいことにこだわる(すぐにお金のことを言う)	2	4.9%
10	信頼できない(疑われる)	2	4.9%
11	性格の違い	1	2.4%
12	その他	8	19.5%

## 夫婦の関係② 配偶者への期待度

配偶者（男性）から期待を寄せられる配偶者（女性）。

期待されない男性配偶者、女性の25%が「期待せず」

配偶者に対する期待度を「大いに期待している」と「やや期待している」とを合わせた期待層の割合でみると、男性は62.7%（26.0%+36.7%）で6割強を占めた。一方、女性の期待度は43.3%（11.3%+32.0%）で4割強にとどまった配偶者に対する期待度は男性の方が20ポイント弱高い

■配偶者への期待度	平均	男性	女性	差異
・大いに期待している	18.7	26.0	11.3	14.7
・やや期待している	34.3	36.7	32.0	4.7
・どちらともいえない	26.0	22.7	29.3	-6.6
・あまり期待していない	16.0	12.0	20.0	-8.0
・全く期待していない	5.0	2.7	7.3	-4.6

配偶者に対する期待点は、「健康でいてほしい、元気で長生きしてほしい」「一緒にのんびり楽しみたい」が多い。

配偶者に対して期待を持っている159名に対し、期待点を自由回答方式にて尋ねたところ、「健康でいてほしい、元気で長生きしてほしい」、「一緒にのんびり楽しみたい」（ともに20票：12.6%）が多かった。次いで「お互い協力・助け合って生活していきたい」（19票：11.9%）と続いた。

### ■配偶者への期待点

コード		件数	%
1	健康でいてほしい、元気で長生きしてほしい	20	12.6%
2	一緒にのんびり楽しみたい（趣味・旅行・グルメ等）	20	12.6%
3	お互い協力・助け合って生活していきたい	19	11.9%
4	個々の自由を尊重したい（楽しんでほしい）	14	8.8%
5	老後の生活（資金面）、老後の支え	13	8.2%
6	一生の伴侶（パートナー）として、いつまでもそばに、心の支え	12	7.5%
7	元気に働いてもらいたい（お金を稼いでほしい）	9	5.7%
8	今のまま、現状を維持したい	9	5.7%
9	老後の世話・介護をしてほしい（体が不自由になったら）	9	5.7%
10	いつまでも仲良くしたい	8	5.0%
11	思いやり、やさしさをもってほしい	8	5.0%
12	家族のまとめ役、相談役、話相手	7	4.4%
13	自分より長生きしてほしい	5	3.1%
14	家事をしっかりとってもらいたい（身の回りの世話）	5	3.1%
15	親（子供）の面倒をみてもらいたい、大切にしてほしい	4	2.5%
16	あらゆる全ての面で期待したい	3	1.9%
17	家事への参加・協力	2	1.3%
18	料理の上達（健康に留意した料理）	2	1.3%
19	その他	14	8.8%
20	具体的にはなし	2	1.3%

### 夫婦の関係③ 幸福感について

幸福感の平均点が最も高いのは、  
男性「夫婦関係」(平均 76.33 点)、女性「他の家族との関係」(平均 79.10 点)。  
低いのは男性も女性も「政治」(平均 40 点台)。

- ①各項目ごとに現在どの程度幸福感を感じているかを 100 点満点で点数化。
- ②男性では「夫婦関係」(平均 76.33 点)が最も高かった。以下、「他の家族との関係」、「住宅」、「健康」、「趣味」と続いた。最も幸福感を感じていない項目は、「政治」(42.20 点)で「資産」(49.71 点)と共に半分の 50 点を下回る結果となった。
- ③女性では「他の家族との関係」(79.10 点)が最も高く、以下「友人関係」、「夫婦関係」、「住宅」、「趣味」と続いた。最も幸福感を感じていない項目は「政治」(43.55 点)となった。
- ④全体的な傾向としては、男性は「自分のこと及び家族関係」に幸福感を感じているのに対し、女性では自分と家族関係に加え、「友人関係」にも幸福感を高く感じている傾向が見られた。また、男女ともに「資産」、「社会」、「政治」にはあまり幸福感を感じていない傾向も窺えた。

■幸福感について	平均	男性	女性	差異
①息子や娘など、他の家族との関係	76.5	73.8	79.1	5.3
②夫婦関係	74.2	76.3	72.1	-4.2
③住宅	69.9	68.7	71.1	2.4
④友人関係	69.2	65.2	73.2	8.1
⑤趣味	68.1	67.0	69.3	2.3
⑥その他	61.7	60.0	63.5	3.5
⑦社会	53.3	52.4	54.2	1.8
⑧資産	53.1	49.7	56.4	6.7
⑨政治	42.9	42.2	43.6	1.3

## V / 団塊世代夫婦の不安

### 夫婦の不安①将来不安

将来の4大不安事項は

「自分の健康」、「配偶者の健康」、「老後の資金や資産」、「年金問題」

- ①将来の不安について尋ねたところ、男女とも多少の順位の変動はあるものの、「自分の健康」(男性:72.0%、女性:76.7%)、「配偶者の健康」(男性63.3%、女性:68.7%)、「老後の資金や資産」(男性:72.7%、女性:61.3%)、「年金問題」(男性:72.7%、女性:72.0%)が4大不安事項となった。
- ②特に、健康面と経済面に不安が集中している傾向が見られたが、男性は、「老後や商売」などの経済面、政治面。女性は健康面(長生き、子供、家族など)や平和な生活などを心配している様子が見受けられた。

■将来の不安	平均	男性	女性	差異
①自分の健康	74.3	72.0	76.7	-4.7
②年金問題	72.3	72.7	72.0	0.7
③老後の資金や資産	67.0	72.7	61.3	11.4
④配偶者の健康	66.0	63.3	68.7	-5.4
⑤社会犯罪	44.7	44.0	45.3	-1.3
⑥地震等の災害	44.3	42.7	46.0	-3.3
⑦経済	44.0	44.7	43.3	1.4
⑧国際情勢	38.7	34.7	42.7	-8.0
⑨環境問題	38.3	37.3	39.3	-2.0
⑩政治	37.7	42.7	32.7	10.0
⑪子供の健康	34.7	30.7	38.7	-8.0
⑫定年後の過ごし方	33.7	29.3	38.0	-8.7
⑬子供の結婚	32.0	28.7	35.3	-6.6
⑭世界平和	27.7	24.0	31.3	-7.3
⑮子供の進学や就職	17.0	20.7	13.3	7.4
⑯住宅問題	15.7	16.0	15.3	0.7
⑰自分が営んでいる商売	10.7	16.7	4.7	12.0
⑱趣味がないこと	8.3	10.0	6.7	3.3
⑲熟年離婚	3.7	5.3	2.0	3.3
⑳その他	2.3	2.7	2.0	0.7
不安はない	0.7	0.7	0.7	0.0

## 夫婦の不安② 人生やり直しへの考え

「もう一度現在の配偶者と結婚する」ことを望む男性は53%で半数を超える。女性は「別の人と結婚する」が、もう一度を上回る。結婚はこりごりの女性は1割に。

- ①男性は「もう一度現在の配偶者と結婚する」(52.7%)、「現在の配偶者とは別の人と結婚する」(43.3%)、「結婚はしない」(4.0%)となり、人生をやり直しても現在の配偶者を選択する男性が半数を超えた。
- ②一方、女性は「現在の配偶者とは別の人と結婚する」(47.3%)、「もう一度現在の配偶者と結婚する」(42.0%)、「結婚はしない」(10.7%)となり、人生をやり直した際には別の人を選択する女性が半数弱を占めた。

■人生やり直しへの考え	平均	男性	女性	差異
・もう一度現在の配偶者と結婚する	47.3	52.7	42.0	10.7
・現在の配偶者とは別の人と結婚する	45.3	43.3	47.3	-4.0
・結婚はしない	7.3	4.0	10.7	-6.7

## V・団塊世代夫婦の危機とその行方

# 1. 家族・世帯の傾向

## 1) 少子・高齢化による世帯変化の動向

1. 結婚期間別・出生児数の割合	→結婚期間 25 年以上の夫婦の 1.3%が子ども数 0
2. 結婚期間別・出生児数 0 人の夫婦の割合推移	→少子化傾向進むも、総合的には横ばい
3. 結婚 10 年未満夫婦の理想、予定子ども数	→積極的に子どもをつくらない割合 2%強
4. 理想の子ども数を持つとしない理由	→経済的な理由が多数
5. 夫婦の社会的認知度 妻の年齢別「夫婦は子どもをもってはじめて社会に認められる」の賛否	→約 40%が賛成
6. 夫婦の社会的認知度 末子年齢別「夫婦は子どもをもってはじめて社会に認められる」の賛否	→子どもがいなくても 20%が賛成
7. 妻のライフコース別、子どものいない夫婦の割合	→共働き夫婦は子どもができにくい
8. 結婚・家族に関する妻の意識 「結婚したら子どもは持つべきだ」の賛否	→約 80%弱が賛成
9. 結婚・家族に関する妻の意識 「結婚しても、人生には結婚相手や家族とは別の自分だけの目標を持つべきである」の賛否	→約 80%弱が賛成
10. 結婚・家族に関する妻の意識 「結婚したら、家庭のためには自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然だ」の賛否	→約 65%が反対
11. 結婚・家族に関する妻の意識 「結婚後は、夫は外で働き、妻は家庭を守る」	→約 35%が賛成
12. 妻の従業上の地位別、妻の家事分担割合	→意外と少ない夫の家事負担
13. 夫の家事遂行割合	→年々増加傾向
14. 夫婦のコミュニケーションのあり方	→ほとんどない夫婦が 1 割
15. 年代別「よくする」と答えた夫婦のコミュニケーションのあり方	→若い世代ほどコミュニケーションをよくとる
16. 年代別理想の夫婦の過ごし方	→若い世代ほど「夫婦一緒」の割合が高い
17. 現実と理想の働き方	→理想も現実も DINKS タイプは 8.2%

平成 9 年 6 月 1 日現在の「結婚と出産に関する全国調査」または平成 10 年「全国家庭動向調査」から

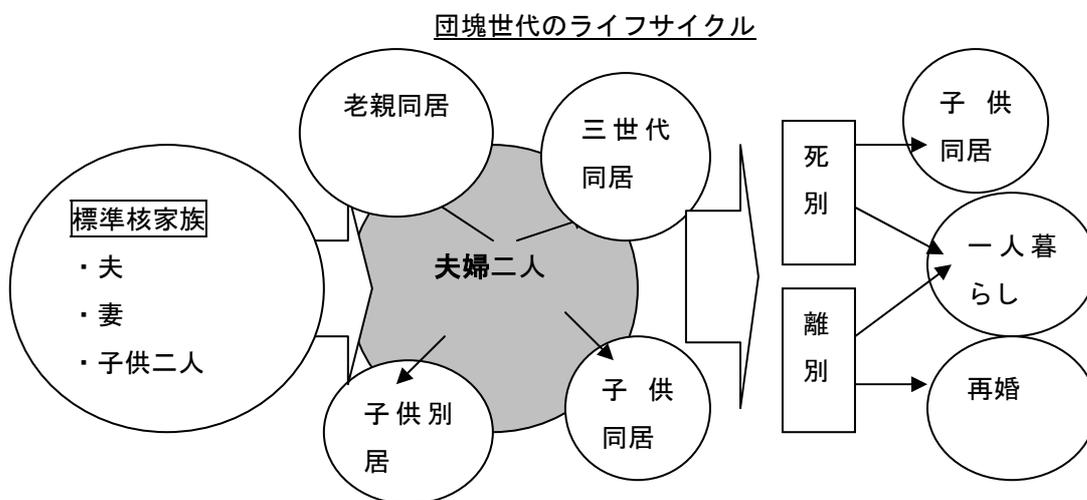
## 2) 家族・世帯変化の傾向

- ①家族は産業経済の変化の中でますます小規模化
- ②国内外をとわず、移動し、住居を変更する人が多くなる（職業、学習、経済上）
- ③単身で生活する期間が男女とも長くなる（晩婚化、高齢化、離婚の増大）
- ④一人っ子、二人っ子、長男、長女が7割以上、18歳未満の子供のいる家庭4割
- ⑤女性の職場進出は増加、地位、収入が上昇し、男性に近づく
- ⑥家族機能の外部化、家事労働の合理化、家庭外から財・サービス購入する傾向大
  
- ⑦男女とも労働時間が減少、自分で自由に使える時間が増す
- ⑧離婚は増大するが、老婚を含む再婚も増大
- ⑨高齢者の増加、夫婦二人暮らし、一人暮らし(オールドシングル)が増える
- ⑩福祉の有料化、民間の福祉サービス充実

## 3) 団塊世代家族の変化ファクターと変化スタイル

団塊世代の家族は、現在大きな変化期を迎えている。その変化スタイルは、主婦が専業なのか就業なのか、あるいは、子供の有無、子供との同居・別居、世帯主の収入や世帯の資産の状態において大きな違いがあり、また、老親の健康状態によっても異なる。しかし、団塊世代においては、本人(夫/妻)の生活志向・生活価値観がより大きく影響を与えている。

いずれにせよ、夫婦二人だけの生活を基本として新たな家族スタイルが生まれ、そのライフスタイルは多様である。



#### 4) 団塊世代家族の変化スタイルとその変化要因

現在の団塊世代は家族の縮小と拡大の狭間に置かれている。

平均寿命が延び、所得収入は低減し、また、子供の結婚による別居同居など、団塊世代本人の意思だけでは家族のスタイルを決めることができなくなり、それらのスタイルを選択する際には、経済的要因、人間関係など下表のように様々な要因が錯綜する。

団塊世代は、現実の問題として、夫婦二人だけの生活をするのか、大家族世帯にするのか、離婚をして一人世帯となるのか決断を迫られる。

以下、その要因と家族スタイルの関係を示しておく。

—家族のスタイルとその要因—

促進要因		増加する家族のスタイル
・平均寿命の伸び	⇔	・四世代同居世帯（祖父母、父母、夫婦、子供）
・経済性、家族・人間関係	⇔	・三世帯同居家族（父母、子供夫婦、孫）
・加齢ライフステージ	⇔	・夫婦だけの世帯
・人間関係	⇔	・子供なし夫婦だけの夫婦
・社会的（仕事や家族の事情）	⇔	・単身赴任
・離婚、家族・人間関係（離婚）	⇔	・単身世帯
・離婚、家族・人間関係	⇔	・母子・父子世帯
・家族の事情と個人の意思	⇔	・再婚世帯
・家族の事情と個人の意思	⇔	・独身世帯

## 2. 分化する団塊世代の世帯・家族

### 1) 団塊世代世帯の「将来推計」－社会保障・人口問題研究所－

社会保障・人口問題研究所の将来予測データで、団塊世代の将来数値を見ると以下の三点が明らかになった。

- ① 高齢化のリード役は団塊世代、70歳台でも約500万世帯。今までにない高齢化スピードとボリュームである。
- ② 夫婦のみ世帯は5年後に60万から100万に、単独世帯は20年後に100万から150万に。
- ③ 夫婦と子供世帯は60歳台で団塊世代の25%になる。

データ①；推計世帯数（「年齢別」世帯数）推移（単位；1,000世帯）     は団塊世代

	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85歳以上
2000	4,397	<b>5,533</b>	4,811	4,316	3,969	3,223	2,096	1,161	687
2005	3,845	4,597	<b>5,543</b>	4,717	4,172	3,735	2,845	1,625	999
2010	4,089	4,032	4,629	<b>5,439</b>	4,555	3,928	3,306	2,206	1,411
2015	4,466	4,271	4,073	4,544	<b>5,264</b>	4,300	3,495	2,587	1,971
2020	5,033	4,659	4,317	3,989	4,403	<b>4,986</b>	3,845	2,755	2,483
2025	4,392	5,253	4,736	4,221	3,866	4,169	<b>4,496</b>	3,053	2,843

データ②；団塊世代の世帯推計(2000年～2025年) (単位；1,000世帯)

	団塊世代 年齢	総数		単独世帯		夫婦のみ		夫婦と子		ひとり親と子		その他	
		総数	5年比	単独世帯	同	夫婦のみ	同	夫婦と子	同	ひとり親と子	同	その他	同
2000	50～54	5,533		925	同	642	同	2,351	同	599	同	1,016	同
2005	55～59	5,543	1.00	1,075	1.16	1,090	1.70	1,895	0.81	513	0.86	971	0.96
2010	60～64	5,439	0.98	1,187	1.10	1,580	1.45	1,371	0.72	423	0.82	878	0.90
2015	65～69	5,264	0.97	1,347	1.13	1,867	1.18	948	0.69	358	0.85	744	0.85
2020	70～74	4,986	0.95	1,504	1.12	1,868	1.00	681	0.72	315	0.88	618	0.83
2025	75～79	4,496	0.90	1,608	1.07	1,611	0.86	485	0.71	288	0.91	503	0.81

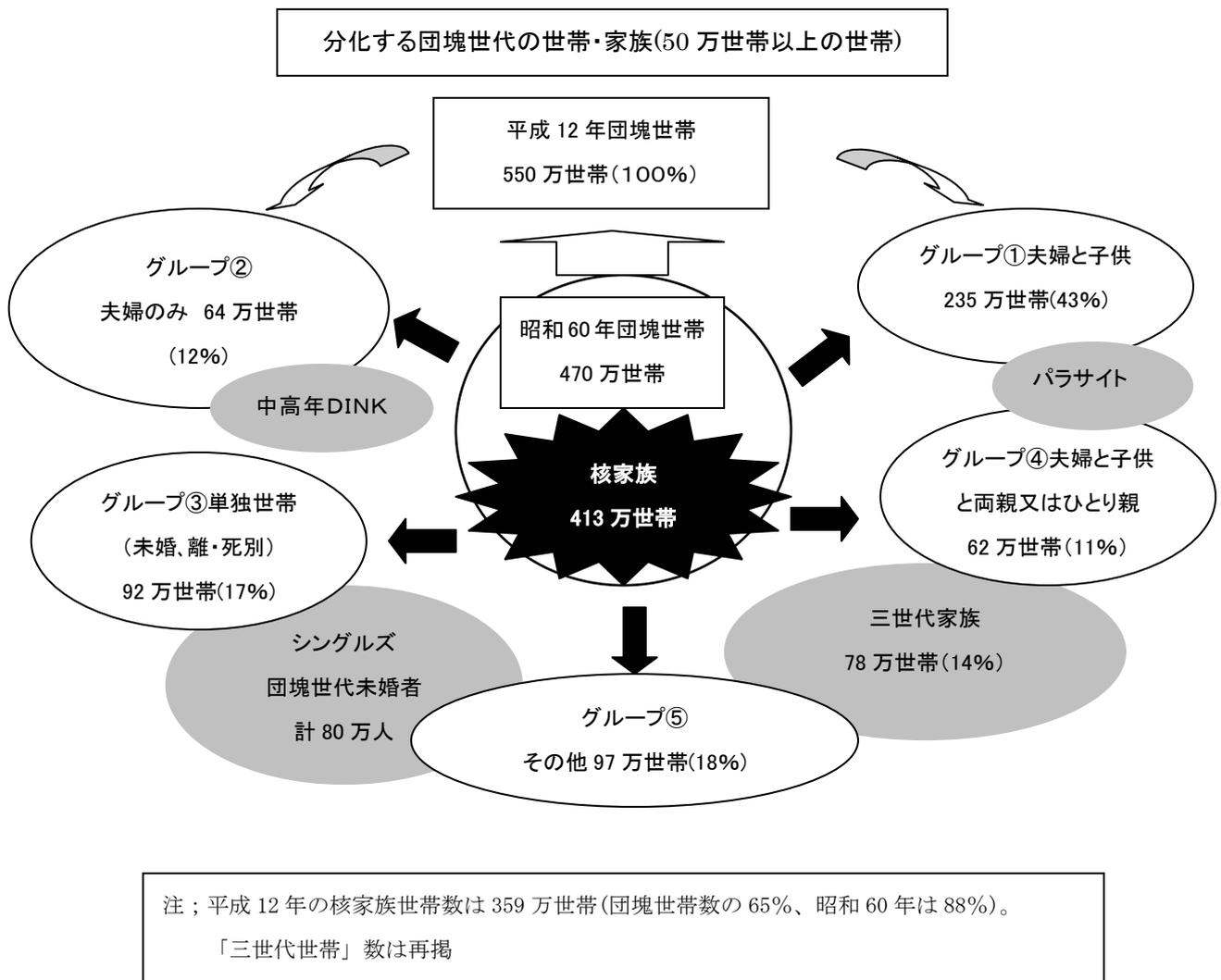
データ③；団塊世代の世帯構成割合(2000年～2025年) (単位；%)

	団塊世代年齢	世帯計	単独世帯	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他
2000	50～54歳	100	16.7	11.6	<b>42.5</b>	10.8	18.4
2005	55～59歳	100	19.4	19.7	<b>34.2</b>	9.3	17.5
2010	60～64歳	100	21.8	<b>29.1</b>	25.2	7.8	16.1
2015	65～69歳	100	25.6	<b>35.5</b>	18.0	6.8	14.1
2020	70～74歳	100	30.2	<b>37.5</b>	13.7	6.3	12.4
2025	75～79歳	100	<b>35.8</b>	35.8	10.8	6.4	11.2

## 2) 分化し再構築される団塊世代の夫婦

団塊世代の人口数は約 1 千万人(平成 12 年国勢調査「50～54 歳」)、世帯数は約 550 万世帯(同)の規模に達するが、かつて団塊世代の特徴であった「夫婦と子供からなる核家族」(同 235 万世帯)は、団塊世帯の半分以上の 43%になっている。

増えているのは、「夫婦のみの世帯」、「単独世帯(未婚、死別、離別)」、「三世代世帯」であり、夫婦と子供からなる核家族=団塊世代という図式は消えている。



### 3) 団塊世代夫婦のグループピング

団塊世代の世帯は、家族人員構成と構成の質（世帯主の収入の多少、主婦の専業・兼業・有業、子供の有無、介護対象者の有無によって、ほぼ5グループに分かれる。

**グループ①**「夫婦と子供からなる」世帯であるが、世帯数は235万世帯（団塊世代世帯総数の43%）。このグループ、子供の独立により「夫婦のみの世帯」に、また、離婚や死別などにより「単独世帯」や「母子世帯」などへ転じるケースが多いが、最近では、子供の未婚や晩婚が増え、「パラサイト家族」として日本に定着しそうな勢いである。ここでの消費は、パラサイト娘に引きずられる母娘ファッション消費など、個人と家族が共生・融合。

**グループ②**「夫婦のみの世帯」で現在64万世帯（同12%）。今後最も増加する世帯。ここでは、長年の子供の教育・扶養中心の生活から、一転、再び夫婦二人の新生活がはじまる。一方で住宅の住み替えや耐久消費財の買い替えなどが生じるが、また、一方で趣味、旅行、あるいは新しいネットワークづくりへの消費が増える。中でも、子供なし・介護者なし・ダブルインカムの「中高年DINKS」の消費（車、住宅、旅行など）からは目が離せない。

**グループ③**「単独世帯」。世帯数は92万世帯（同17%）となり、100万世帯に達する勢い。熟年離婚で単独世帯となるケースも増えてきたが、注目しておきたいのは、団塊世代の未婚者80万人（男性が約53万人、女性は27万人）という存在である。人生100年時代といわれるなか、最近、未婚同士や、離婚した後の中高年の再婚も増えているようだが、この未婚者の存在が今後の消費にプラスに働くのかマイナスに働くのか定かではない。しかしかつて独身貴族といわれていた中高年シングルズの消費（住宅、車の購入など）に注目は集まる。

**グループ④**「夫婦と子供と両親またはひとり親からなる」世帯である。典型的ないわゆる二世帯住宅に住むイメージの世帯で、56万世帯（同10%）。現在増加しつつあるこの三世帯世帯化は、従来の在来型の大家族主義（縦社会）とは大きく異なり、全家族で相互にそれぞれの意思や行動を尊重し、サポートしあうという意味において注目される。新しい大家族消費（二世帯住宅・リフォーム、複数多量の車、通信情報機器等の買い替え、医療関連消費）が復活する可能性が高い。ちなみに、4世代以上を含めた三世帯世帯は78万世帯（同14%）となっている。

**グループ⑤**①～④のグループ以外の世帯で97万世帯いる。

「母親と子供」（51万世帯）、「父親と子供」（10万世帯）、その非親族世帯など様々な世帯が含まれている。このグループ世帯は、いずれ単独世帯へと転じるが、消費への分野への影響力は少ない。長寿化による介護問題などが重くのしかかる世帯である。

### 3. まとめ・団塊世代夫婦の行方

団塊世代夫婦は、団塊世代夫婦の親が自分の子供(長男以外)に望んでいた「独立した世帯」を築き上げてきた。つまり核家族として独立したわけである。

しかし、親となった団塊世代夫婦は、マイ家族にこだわってきたが故に、また、自分たちの子供からの長男・長女時代ということも重なり、こと子供の独立に対しては、団塊世代の親たちほど厳しくない。子供の結婚後の同居については、それが無理でもせめて近居であってほしいと願う。また、子供も近居をよしとする。いわば新しい三世代ファミリーの再構築である。確かに、家族みんなでというのが団塊世代家族の特徴でもあるが、親離れ子離れということができない。かつての親の世代のように、子の独立を相互に認めるという考えはない。

なぜなら団塊世代は、夫婦だけで「自分達のファミリー」を作り上げたのだからだ。

しかし、高成長期とバブル消費の幸せを体験し、戦後最大の長期不況という経済・生活環境の中で、団塊世代の家庭は、夫婦二人の意識や意思だけでは抵抗できないほどの圧力で、ズタズタにされている。親・子・孫とかたちは昔風の三世代家族だが、団塊世代の家族や夫婦を見ていると、昔の親ほど厳しい生活価値観は見られない。子供に対して厳しくなれず、また、夫婦関係もあいまいにしてしまう。あいまいにするから、結局、三世代志向モラトリアム状態が続き、結局、夫婦の関係は、過去の夫婦関係をずるずる引きずりまわし、あいまいなまま、すれ違いと相互批判が繰り返しているのだ。

団塊世代夫婦に、過去の夫唱婦随、空気のような存在としての夫婦というような高齢夫婦イメージを見つけることは難しく、また、過去世代の夫婦関係や欧米の夫婦関係を参考にすることも出来ない。

それでは、新しい夫婦関係を考え、作り上げるにはどうすればよいのか。

## 1) このままだと、すれ違い・相互批判を繰り返す団塊世代夫婦

### ①ほとんどの夫は家計の実態をよく知らない。

団塊世代が家庭を持ち始めた頃から、「夫婦は平等であるべきだ」と思う人は76%から85%へと上昇している。

又、「夫も家事を分担するべきだ」は49%から69%へと増加している。しかし、国際的に比較すると低いようだ。

欧米に比べまだ平等意識が低く、夫の分担が少ないことは確かだが、そのことは必ずしも、日本の妻たちの位置が低いという事につながるわけではない。むしろ実態的には、家庭における女性の位置は意識面で見られるよりはるかに高い。

例えば、日本では家計費を管理しているのは妻である。

妻が家計（支出面）を牛耳るのは、江戸時代から続いた風習みたいなようなもので、必ずしも、そのことが男女夫婦の主導権の問題にはならなかったが、問題は、収入については銀行振込などオープンになり、夫の給与も妻自身の給与も、妻が銀行口座から下ろして、家計費として自由に使うことになってしまったことである。家計に関しては、ほとんどの夫は妻任せとなっている。

金銭的な算段に夫は基本的に疎くならざるをなってしまう、家計にもひいては家庭についても無関心になってしまった。

### ②家庭内の物事の決定権も、妻の側に移っている

収入から支出まで管理されてしまったのではない。最近では、お金の配分だけでなく、さらに、家庭内の物事の決定権も、妻の側に移ってきている。本研究のアンケート調査「団塊世代夫婦の今・その実態」（参考；第Ⅲ章）の中でも、

- ・家族でどこのレストランに行くか。
- ・家電品を買うのか買わないか。
- ・どこへ家族旅行するか

など、消費行動や生活行動だけでなく、

- ・夫や妻の両親と同居するかどうか
- ・子供と同居するかどうか
- ・お墓をどうするか

など将来生活の場面においても、妻が意志決定する度合いが大きく伸びている。家庭及び家庭の将来について考える基盤も情報も夫は持っていない。それでよしとしてきた夫に問題があるが、夫と妻の情報格差は拡大するばかりである。従って、すれ違い相互批判が日常的にならざるをえなくなっている。

### ③新しい個人主義が家庭内に持ち込まれた

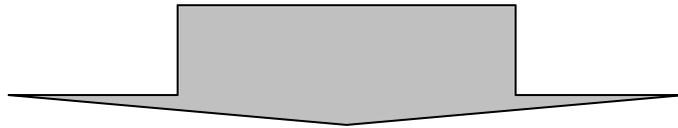
最近新しい個人主義が家庭内に持ち込まれている。家族の間でも個を大切にしたいという傾向である。

例えば「夫婦の間でもプライバシーは大切にしたい方が多い」「既婚者でも異性の友人を持っても構わないと思う」という考える人は増加しており、その延長線上にある離婚や再婚も増えている。

その基本的な理由は、妻たちが、いまの結婚を続けても自己実現が不可能だと感じる場合が増えたからだ。最も大切なのは、自分が自分らしくあることだと女性たちは主張し、それを阻害するものは拒否するのだ。

空気のように軽くて、でもそばにいつも漂う人生の同伴者は欲しいという人の願いは、夫婦関係の無反省的維持を求める人に限って強くなるが、夫婦互いの努力なしに、そのような願いをかなえることは出来ない。

多忙を理由に、家庭や相手の考えなどへの無関心や無反省が日常化すれば離婚や再婚は増えてゆく。それこそ欧米並みの離婚・再婚の数字が出てくる可能性がある。



革新的でパワフルな団塊世代とはいえ、家庭において、子供の教育、家計管理、家族成員の生活管理といった、家庭の持つ主要な機能を独占支配しているのが「母」「姑」と呼ばれる女性たちの実態である。

夫は何をすべきなのか？もはや、過去を振り返っても始まらない。

新しい家庭を作ることに夢中になってきた団塊世代の夫たちに何が残されているのか。

## 2) 戦後の民主的家族モデル（団塊ニューファミリー）を壊す少子高齢社会

現在の日本には家族制度というものはないが、団塊世代が生まれた昭和 20 年代前半の時代は、日本はまだ占領国であり日本は開放されておらず、民主化は掛け声のみで実際の生活の中には古い価値観がはびこっていた。また、民主制度や男女平等という考え方も教育の場でしかなく、団塊世代が生まれ育った基盤である親の家では相変わらず家父長制が生き続けていた。団塊世代は教育という場のみで民主化を良とされ、この教育の場によって家父長制度に凝り固まった親たちと別れを告げているのである。

団塊世代は、親から子が切り離されて成長したのである。親から子に伝える物事や価値観は子に伝えられなくなり、子である団塊世代は民主という名の上に守られて親から離脱して言った。

自由な教育、自由な消費、自由な恋愛、自由な結婚、自由な家庭などなど、誰に教わることもなく、また、誰も教えることなく団塊世代は新しい家族を作った。そのプロセスで、直系家族制と世代の連続性（夫婦関係は直系家族世帯における親子関係に従属）は断ち切られているのである。

団塊世代の男女は、労働雇用者となって各自個人所得を得る様になり家族所得を前提とする家制度から離脱できるようになり、結婚を契機に、直系から切り離れた新しい夫婦家族（欧米型の夫婦家族の生活面だけをモデルとした世代の非連続性を基本とする）を形成した。

戦後 50 年のさまざまな新しい法制（新憲法、民法改正、男女機会均等法）や社会生活基盤（自営業、農業から「雇用者」を中心とした社会へ）や人口基盤（多産多死から多産少死、そして少産少死）へ）などが、日本の古い家族を戦後の民主的家族モデル（＝団塊世代ニューファミリー）へと導き、日本に根付かせた。

しかし、民主的家族モデルも半世紀を経て色あせてきているのも事実だ。  
例えば、

- ・ 子供中心の家族主義は、養育期間が長期化、扶養できなくなった
- ・ 高齢長寿化により夫婦の長寿化が進み、夫婦関係に軋みがでてきた
- ・ 雇用社会の変質・変化は、組織責任から自己責任をしいるようになった

など、民主的家族モデルの基礎・基盤は崩れ始め、モデルそのもののモデルチェンジが求められている。そのモデルチェンジも目標も誰も教えてくれない。

先の家父長制の家族制度否定と名ばかりの民主教育に守られできた家族モデルであったことが明らかになってしまったが、もはや誰も手を差し伸べられないのである。実は、団塊世代が、最もモデルチェンジを求められているのに、そのことを最も恐れているのではないだろうか。

### 3) 「ジャパン夫婦モデル」の可能性

#### **可能性① もとは個人同士、新しい夫婦もそこからスタート**

ひとつは、夫婦関係の原点に戻る事である。

若い時の団塊世代の夫婦は二人で子供の誕生を喜び、子育てや教育も親の世代に比べればはるかに夫婦が協力して行い、子供の成長を共に参加しつつ楽しんできた。そして、夫婦の相互の信頼や義務と責任も子供の成長という目標がありそれが夫婦の絆であった

しかし子供の成長という共通の目的が失われた現在、団塊世代夫婦は、子供の成長の終わりはまた夫婦の絆の終わりを意味する。それぞれが横を向き始め、これからの夫婦関係を考えることに躊躇し始める。夫婦の実態アンケート調査でもお墓の問題、実際の生活行動、子供や親との同居の問題において、また、将来の考え方にかかなりの食い違いがはっきりした事を見せている。

なぜ団塊世代は一步踏み出せないでいるのか。躊躇するのか。

それは、団塊世代が親から独立し形成した「自分の独自の家族」だからである。アメリカのファミリーをイメージしたり、いろいろな家族像を描きつつ自分の家族を意識的に自らの手で作り上げたといつてよい。家制度でがんじがらめになると思われた本人や自分たちの家族をその家制度から開放させたのである。親からの援助も親戚の協力も、決して親や家系を保持する関係作りを目的としたわけではなく、それは自分たちの新しい家族をつくる目的に合致したから受け入れたといつてよい。しかし、そのマイ家族の分散・分離が始まると、特に男性にその傾向が強いが、マイ家族の分裂を一生懸命繕うとする。しかし、新しい夫婦関係を作る余裕さえも、又想像さえもできないのが現状である。

新しい夫婦関係に入るには、家庭の原点に戻ればよい。

団塊世代夫婦の出発点は、自由恋愛から結婚へというように個人と個人の関係作りの巣箱から始まっている。夫婦とはいえ、もとをただせば個人と個人の関係であるが、子供の成長までは、その個人を後ろに引かせることが重要であっただけなのである。

夫婦は、子供がいる間は「父と母」である。しかし、子供がいなくなると突然夫婦は「夫と妻」の関係がよみがえるのである。夫と妻はその関係において再び緊張関係に陥り、二人の共通目標を失ったのに奇妙な緊張感がはびこる。その段階で、特に女性は、妻という名において個人が消される恐れとむなしさを意識させられる。夫婦だけの生活においては、個人同士は個人の関係以外何者でもないはずだ。

死を迎えたとき、墓は「家」の墓ではなく、「二人だけ」の墓を、「自分」の墓を作りたいという団塊世代は多い。

## **可能性②** 新しい夫婦関係をつくる宿命と責任を課せられた団塊世代

新しい夫婦関係を作るには、二つ目は、夫婦とは何かを問い直すことである。子供の結婚・独立で子供との同居生活が終われば家族の絆は変質する。その変質に真っ正直に向かい合うことではないだろうか。現在の夫婦関係を一度断ち切って、つまり、歴史的な生活モラルの夫婦の関係という呪縛から脱して、個人との関係に切り替えることである。

家族とか夫婦という言葉にはいろいろな価値観や感情が残るが、その家族や夫婦という「容(かたち)」を壊さない限り新しい関係を見つけることはできない。「容」を壊すことが人間否定につながり社会のモラルから外れると非難されそうだが、しかし、果たして、国際テロにあっても人質になってもそれは自己責任として取り扱い、また年金問題においても数字合わせと自己責任を主張する現代社会に社会モラルはあるのだろうか。

そのようなモラルなき社会でこそ、人口の 1 割を誇る巨大な塊である団塊世代が新しい何かを作り出すはずである。人生 60 年社会システムは、団塊世代の人生 80 年に合わないからである。

団塊世代の成長は、常に社会システムの供給不足から生まれてきたが、その供給が提供された途端に日本の経済社会は供給過剰となってしまったのである。そして、団塊世代という異常な人口の出現後の日本は、ひたすら少子化社会へと突き進み供給過剰に歯止めが利かなくなってしまう。ここで、少子社会化を促したのは、実は団塊世代であることを思い出さなければならない。

団塊世代が生まれた頃は、兄弟姉妹数は 4, 5 人が平均であるが、団塊世代が子供を生む頃はすでに 2 人となっている。その事で明らかのように、団塊世代が少子高齢社会を促した張本人なのである。

多産少子社会の時代に団塊世代は生まれ、結婚し、子育てし、「旧家族モデル」を否定し、夫婦二人でニューファミリーという日本の「新家族モデル」を生み出した。その新家族モデルも 30 年を経て、少子高齢社会の今、消え去ろうとしている。夫婦二人だけの生活をはじめた団塊世代は、新しい家族モデルを作ったように、親の世代の夫婦でもない、昭和一桁の世代の夫婦でもないオリジナルな「新しい夫婦モデル」をつくらざるをえないのである。

その新しい夫婦モデルイメージは、子供ができ、孫ができるといった昔風(多産化時代)の拡大的スパイラルな夫婦ではなく、個人へ個人へと省力化(少子高齢時代)する関係志向の夫婦のイメージである。

### **可能性③ 夫婦は「父と母」から「夫と妻」へ、そして「君と僕」の関係に**

三つ目は、もとの関係にこだわらないことである。

夫婦関係は、「父と母と子」という関係がベースとなって夫婦が認識・意識され、子供がいなくなれば必ず「夫と妻」の関係としての夫婦は認識・意識される。その「夫と妻」の夫婦の関係は、縦の主従関係（金銭的には夫が主、それ以外では妻が主）から横の水平関係となり、もちろん思い出や恨みやつらみはその復活劇の中心テーマとなることは間違いないが、若いころの個人関係が復活する。

その個人関係が、かつての「父・母・子」の親子関係のなかでの生活の仕方、考え方、振る舞いを許しあえるかどうか、またそのことを話し合えるコミュニケーション能力が残されているかによってその復活劇の最後は大きく変わる。

これからの関係をどう作るのかが大切な問題なのであって、現在の夫婦関係のほころびばかりを取り繕うことばかりに雲泥する必要はない。それぞれの今後の生き方や金銭を含め健康や生活の心配をそれぞれ相手の立場に立って「あなたが一人で生きてゆく」にはどうするのかを、互いに想像しあい、心配しあえばよいのである。

妻と夫という友人関係を確保することが基本である。この基本の個人同志関係が確立されれば、共同時間や共通空間をもつという具体的な関係作りには入ることができる。既存の価値観で拘束し合う関係よりも生かし合う関係を作る努力が必要である。

百年前の日本の家父長制を否定し、欧米の合理主義生活には手が届かず、ニューファミリー幻想に惑われ続けてきた団塊世代夫婦は、自分の作ってきたマイファミリーを、自分たちの子供と一緒に壊していることを素直に認めるべきである。壊すことを恐れず、夫婦も子供たちとの親子関係も、本当の「家族の絆」は何なのか、「人間の絆」を考えなければならない時代が来たのである。

少子高齢化は新しく作り上げた家族を消し、夫婦関係を消す。それは個人の意識や期待、社会の意識や希望とを無視して突き進んでゆく。

団塊世代が半世紀以上も、ある国の中心世代としてあり続けるというのは、世界中を見てもまた、歴史で見ても日本だけである。

今後の団塊世代夫婦の姿かたちはジャパン夫婦モデルとなって世界の注目を浴びることになるであろう。

(了)